



大阪大学・京都大学

# 公共圏における科学技術 活動報告

# 2022

# 目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか.....	3
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について.....	4
<b>1. 教育プログラムの実施.....</b>	<b>7</b>
• 大阪大学の取り組み.....	8
• 大阪大学 特色ある授業.....	17
• 京都大学の取り組み.....	19
• 京都大学 特色ある授業.....	24
• 合同講義.....	26
• 阪大学生の声.....	30
• 京大学生の声.....	32
• STiPS 修了生ネットワーク.....	33
<b>2. プログラム推進委員会の運営.....</b>	<b>35</b>
• 実施体制.....	36
• アドバイザー会議.....	37
• カリキュラムの発展及び拡充.....	37
• 研究会やイベント開催の企画及び調整.....	38
<b>3. SciREX 事業への参画.....</b>	<b>41</b>
• サマーキャンプへの参画.....	42
• 他拠点への講師派遣.....	44
• コアコンテンツ作成、行政官研修などへの講師派遣.....	44
<b>4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施.....</b>	<b>47</b>
• STiPS Handai 研究会（シリーズ「科学技術×公共政策」ほか）.....	48
<b>5. 共進化実現プログラムの実施.....</b>	<b>55</b>
• 「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創.....	56
• 児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用.....	57
<b>6. 関西ネットワークの発展.....</b>	<b>59</b>
• STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）.....	60
<b>7. 国際連携の推進.....</b>	<b>67</b>
• 国際連携.....	68
• 海外調査及び発表等.....	68

<b>8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等） .....</b>	<b>69</b>
• 大阪大学.....	70
• 京都大学.....	75

## はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きてみたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きてみたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きてみたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多

様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 設立拠点長 小林傳司(大阪大学)

## ❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere：STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

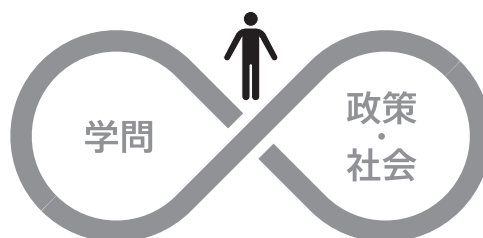
STiPSでは、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



### 教育拠点としての STiPS

STiPSでは、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



### 研究拠点としての STiPS

STiPSでは、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

### 実践拠点としての STiPS

STiPSでは、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



## 主要メンバー一覧（2023年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	名誉教授／設立拠点長	科学哲学、科学技術社会論
平川 秀幸	大阪大学 CO デザインセンター	教授／拠点長	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学 CO デザインセンター	教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
渡邊 浩崇	大阪大学 CO デザインセンター	特任教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
鹿野 祐介	大阪大学 CO デザインセンター	特任助教	人をめぐる哲学・倫理学、哲学対話教育
小林 万里絵	大阪大学 CO デザインセンター	特任研究員（非常勤）	科学コミュニケーション
真栄城 拓也	大阪大学 CO デザインセンター	特任研究員（非常勤）	国際政治学、日米関係史、沖繩返還
神里 達博	大阪大学 CO デザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データリテリフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授	科学社会学、科学技術社会論、科学技術政策論
水町 衣里	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授／URA	科学コミュニケーション論、科学教育
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
井出 和希	大阪大学感染症総合教育研究拠点	特任准教授	社会医学、疫学、政策科学、応用倫理学
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」

京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授／ユニット長	薬剤学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授／副ユニット長	倫理学、ターミナルケア、死生学
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
伊藤 順一	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経済学、応用ミクロ経済学、計量経済学
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授	可視化
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
中山 健夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
広井 良典	京都大学人と社会の未来研究院	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
森川 輝一	京都大学公共政策大学院	教授	政治理論、政治思想史
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
南 真祐	京都大学 iPS 細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
間宮 弘晃	京都大学 iPS 細胞研究所	特命講師	薬価・薬事関連政策
祐野 恵	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	公共政策、地方自治、地方議会



# 1. 教育プログラムの実施

---



# 1. 教育プログラムの実施

## 大阪大学の取り組み

### 大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」、大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016年6月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013年4月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が2011年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目6単位および選択科目8単位以上の計14単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国5拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく2013年4月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が2008年度から始めたものです。これは、大学院生および6年制課程の学部5、6年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目2単位および選択科目6単位以上の計8単位以上の修得が必要です。

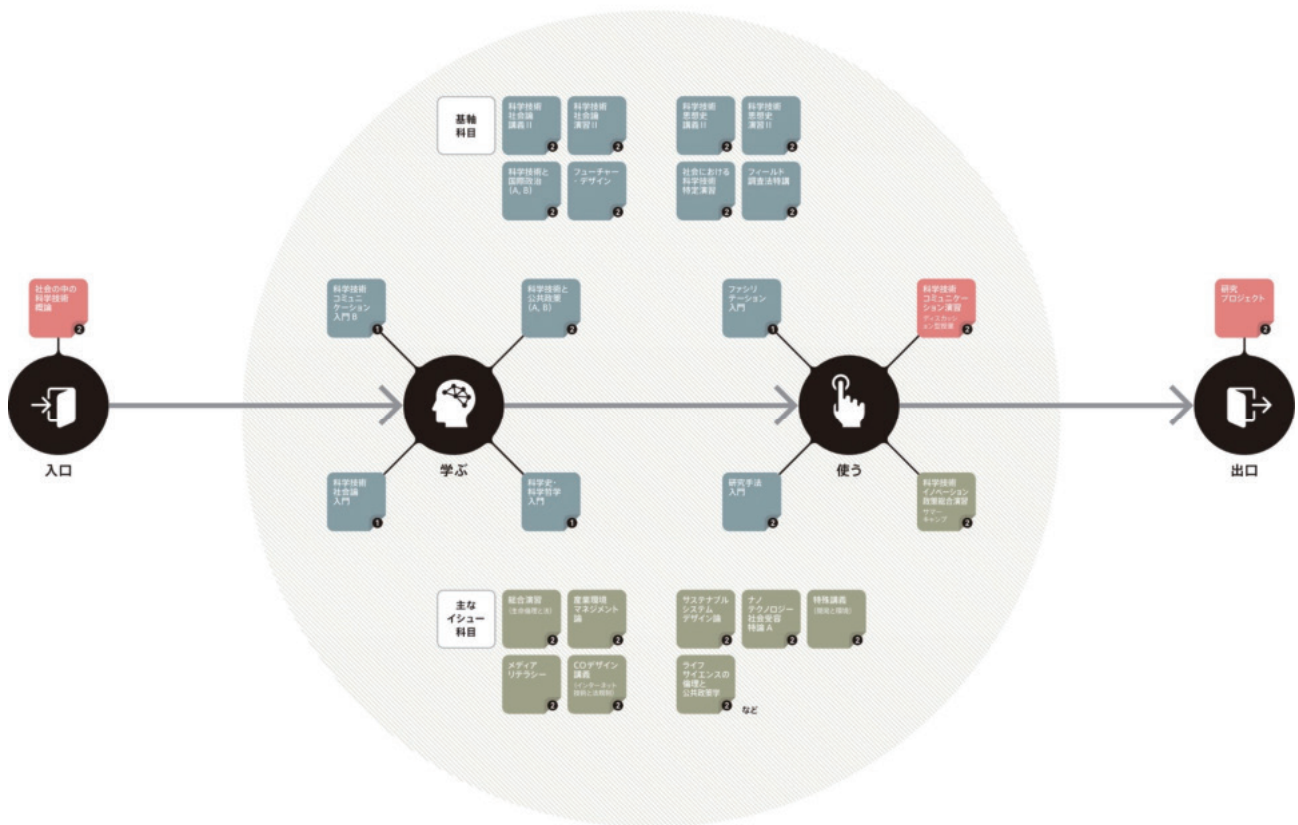


図 副専攻／高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の科目

## 大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」概要

2022年4月からは、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」を修了した後の博士後期課程の学生を対象とした発展コースとして、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」を新設しました。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」で取り組んだ研究プロジェクトなどを継続・発展させた研究活動（学会発表や論文公表、一般社会へのアウトリーチ活動などを含む）を行うことを目標にします。通常2～3年間での修了を想定しています。修了には必修科目12単位および選択科目2単位以上の計14単位以上の修得が必要です。

## 大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

### 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」(修了要件 14 単位以上) 履修登録者数、修了者数など

2022 年度 在籍者数の合計：18 人

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間研究科：2 人、理学研究科：3 人、工学研究科：2 人、情報科学研究科：1 人、人文学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 内部進学：1 人、民間企業：1 人）

\*副専攻プログラムの修了証はこれまで、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

#### 参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

##### 2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、薬学：1 人、工学：2 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

##### 2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

##### 2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：3 人、工学：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学：1 人、民間企業：2 人）

##### 2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学：2 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

##### 2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：1 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

##### 2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、基礎工学：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳 民間企業：3 人）

##### 2019 年度

履修登録者数：17 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 進学：1 人、民間企業：1 人）

##### 2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：6 人、薬学：1 人）

修了者数：8 人（進路内訳 在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人、不明：1 人）

##### 2021 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：1 人、情報科学研究科：1 人）

修了者数：5 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：3 人）

## 高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2022 年度 在籍者数の合計：17 人

履修登録者数：13 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：2 人、理学研究科：3 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：1 人、人文学研究科：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、その他：2 人）

\* 高度副プログラムの修了証はこれまで、学生が副専攻の 8 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、8 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 8 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

### 参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

#### 2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：3 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）  
修了者数：0 人

#### 2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：1 人、工学：4 人、基礎工学：3 人、国際公共政策：2 人、生命機能：1 人）  
修了者数：3 人

#### 2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）  
修了者数：5 人

#### 2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、法学：1 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）  
修了者数：8 人

#### 2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：2 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、国際公共政策 1 人）  
修了者数：8 人

#### 2018 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、医学系：3 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人）  
修了者数：4 人

#### 2019 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 理学：3 人、医学系：2 人、工学：1 人）  
修了者数：4 人

#### 2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人）  
修了者数：9 人

#### 2021 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、経済学研究科：1 人、理学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、工学研究科：1 人、国際公共政策研究科：1 人）  
修了者数：3 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：1 人）

## 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2022 年度 在籍者数の合計：3 人

履修登録者数：3 人（所属研究科内訳 人文学研究科：1 人、理学研究科：2 人）

修了者数：0 人

\*副専攻プログラムの修了証はこれまで、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

## 大阪大学 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」(修了要件 14 単位以上)

### 開講科目一覧 (2022 年度)

科目カテゴリー	開講部局 (課程)	授業科目名	主担当教員	単位	学期	
入門必修科目 (2 単位)	CO デザインセンター (院)	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏	
必修科目 (2 単位)	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中 (夏)	
連携必修科目 (2 単位)	CO デザインセンター (院)	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年	
選択科目 I : 基軸科目群	CO デザインセンター (院)	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬	
	CO デザインセンター (院)	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春	
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 A		1	不開講	
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 B	八木 絵香、他	1	夏	
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 B		1	不開講	
	CO デザインセンター (院)	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春	
	CO デザインセンター (院)	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏	
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 A	渡邊 浩崇	1	春	
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 B	渡邊 浩崇	1	夏	
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 A	渡邊 浩崇	1	秋	
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 B	渡邊 浩崇	1	冬	
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術社会論講義 II (科学技術社会論入門)	中村 征樹、他	2	春～夏	
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術思想史講義 II(社会の中の科学技術一クリティカルシンキングを実践する)	中村 征樹	2	秋～冬	
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術社会論演習 II (シチズンサイエンス: 『The Science of Citizen Science』を読む)	中村 征樹	2	秋～冬	
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術思想史演習 II (科学技術社会論セミナー)	平川 秀幸	2	春～夏	
	人間科学研究科 (博士前期)	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏	
	人間科学研究科 (博士前期)	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬	
	工学研究科 (博士前期)	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏	
	選択科目 II : イシュー科目群	CO デザインセンター (院)	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中 (夏)
		CO デザインセンター (院)	科学技術と社会特論 A		1	不開講
CO デザインセンター (院)		科学技術と社会特論 B		1	不開講	
CO デザインセンター (院)		メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中 (秋～冬)	
CO デザインセンター (院)		CO デザイン講義 (インターネット技術と法規制)	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬	
法学研究科 (博士前期)		総合演習 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬	
法学研究科 (博士後期)		特定研究 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬	
医学系研究科 (博士前期)		ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中 (夏)	
工学研究科 (博士前期)		産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏	
工学研究科 (博士前期)		サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏	
基礎工学研究科 (博士前期) (エマージングサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セクタ-提供)		ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2	集中(春～夏)	
基礎工学研究科 (博士前期) (エマージングサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セクタ-提供)		ナノテクノロジー社会受容特論 B		2	不開講	
国際公共政策研究科 (博士前期)		特殊講義 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬	
国際公共政策研究科 (博士後期)		特殊研究 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬	

## 大阪大学 高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」(修了要件 8 単位以上)

### 開講科目一覧 (2022 年度)

科目カテゴリー	開講部局 (課程)	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目 (2 単位)	CO デザインセンター (院)	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
選択科目：6 単位以上	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中 (夏)
	CO デザインセンター (院)	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	CO デザインセンター (院)	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 A		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 B	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション入門 B		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター (院)	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 A	渡邊 浩崇	1	春
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 B	渡邊 浩崇	1	夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 A	渡邊 浩崇	1	秋
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 B	渡邊 浩崇	1	冬
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術社会論講義 II (科学技術社会論入門)	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術思想史講義 II (社会の中の科学技術一クリティカルシンキングを实践する)	中村 征樹	2	秋～冬
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術社会論演習 II (シチズンサイエンス:『The Science of Citizen Science』を読む)	中村 征樹	2	秋～冬
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術思想史演習 II (科学技術社会論セミナー)	平川 秀幸	2	春～夏
	人間科学研究科 (博士前期)	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科 (博士前期)	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科 (博士前期)	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中 (夏)
	CO デザインセンター (院)	科学技術と社会特論 A		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	科学技術と社会特論 B		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中 (秋～冬)
	CO デザインセンター (院)	CO デザイン講義 (インターネット技術と法規制)	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
	法学研究科 (博士前期)	総合演習 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科 (博士後期)	特定研究 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科 (博士前期)	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中 (夏)
	工学研究科 (博士前期)	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科 (博士前期)	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科 (博士前期) (エマージングサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セツタ提供)	ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2	集中 (春～夏)
	基礎工学研究科 (博士前期) (エマージングサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セツタ提供)	ナノテクノロジー社会受容特論 B		2	不開講
	国際公共政策研究科 (博士前期)	特殊講義 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬
国際公共政策研究科 (博士後期)	特殊研究 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬	



大阪大学 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2022 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目（12 単位）	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 1	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 2	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 3	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 4	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 5	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 6	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
選択科目（2 単位） * 学問諸分野を広く理解するために、原則として「公共圏における科学技術政策」の副専攻プログラムの在籍時に、履修していない科目を履修して下さい。	CO デザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	CO デザインセンター（院）	ファンリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門 A		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門 B	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門 B		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 A	渡邊 浩崇	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 B	渡邊 浩崇	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 A	渡邊 浩崇	1	秋
	CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 B	渡邊 浩崇	1	冬
	人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論講義Ⅱ（科学技術社会論入門）	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史講義Ⅱ（社会の中の科学技術—クリティカルシンキングを实践する）	中村 征樹	2	秋～冬
	人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論演習Ⅱ（シチズンサイエンス：『The Science of Citizen Science』を読む）	中村 征樹	2	秋～冬
	人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史演習Ⅱ（科学技術社会論セミナー）	平川 秀幸	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	CO デザインセンター（院）	科学技術と社会特論 A		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術と社会特論 B		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋～冬）
	CO デザインセンター（院）	CO デザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （エラジックサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セタ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2	集中（春～夏）
	基礎工学研究科（博士前期） （エラジックサイエンスデザイン R <sup>3</sup> セタ提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 B		2	不開講
国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	
国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	

## ❖ 大阪大学 特色ある授業

### 「社会の中の科学技術概論」(春・夏学期 隔週水曜 5・6限)

この科目は、ゲストレクチャー(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)とがセットになったオムニバス形式の講義・演習スタイルで運営されています。

社会の中で科学技術はどのような役割を果たし、どのような問題を惹起しているのか、人間・社会にとって望ましい成果を生み出すにはどうしたらよいのか、研究者や政策決定者、事業者、市民にはどのような責任や役割があるのかについて、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題(Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)」の観点から、多角的に考えました。第5回までは講義、第6回以降はゲストによる講義(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)を行いました。各回の講義内容及び担当した講師は以下の通りです(ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。

### 「社会の中の科学技術概論」

第1・2回(2022年4月13日)

「イントロダクション」平川 秀幸(大阪大学 教授)

「社会の中の科学、社会のための科学:ブダベスト宣言から20+3年」

小林 傳司(大阪大学名誉教授)

第3回(2022年4月27日)

「科学技術と社会・政策のこれから」平川 秀幸(大阪大学 教授)

第4・5回(2022年5月11日)

「社会の中の科学技術概論-科学技術コミュニケーション-」

八木 絵香(大阪大学 教授)

「科学技術と公共政策・国際政治」渡邊 浩崇(大阪大学 特任教授)

第6・7回(2022年5月25日)

「生命科学のELSI」鹿野 祐介(大阪大学 特任助教)

第8・9回(2022年6月1日)

「生命科学とELSI/RRI」標葉 隆馬(大阪大学 准教授)

第10・11回(2022年6月22日)

「レギュラトリーサイエンス論~基準値を作ってみよう~」

岸本 充生(大阪大学 教授)

第12・13回(2022年7月6日)

「イノベーションを/が規制する」長門 裕介(大阪大学 特任助教)

第14・15回(2022年7月13日)

「総合討論」平川 秀幸(大阪大学 教授)



## 「科学技術コミュニケーション演習」(集中講義 [夏])

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。

2022年度は「顔認証・顔認識技術を利用したシステムを大阪大学のキャンパスに導入するケース(架空の設定)」をグループ討議の課題として取り上げました。講義に先立って、NEC Future Creation Hub KANSAIを見学し、顔認証・顔認識技術を体験しました。講義では、まず顔認証技術の「ユースケース案」およびその倫理的・法的・社会的課題(ELSI)について議論を通して検討し、その上で専門家とのディスカッションを行い、ユースケースとそのELSI課題への対応をまとめるという流れでした。

3日間のスケジュールと内容は次の通りです。主に、グループワークを中心に進められました。

### 1日目(9月28日)

オリエンテーションと自己紹介

顔認証技術の「ユースケース案」の検討

その場合の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)について検討

### 2日目(9月29日)

ELSI課題の再整理と専門家への質問の作成

専門家とのディスカッション

### 3日目(9月30日)

ユースケースと考えられうる課題、その対応策を作成

顔認識・顔認証技術をめぐる諸課題について、自らの専門分野から貢献できることについての個人ワーク(レポート提出)



## ❖ 京都大学の取り組み

### 京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

#### 「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

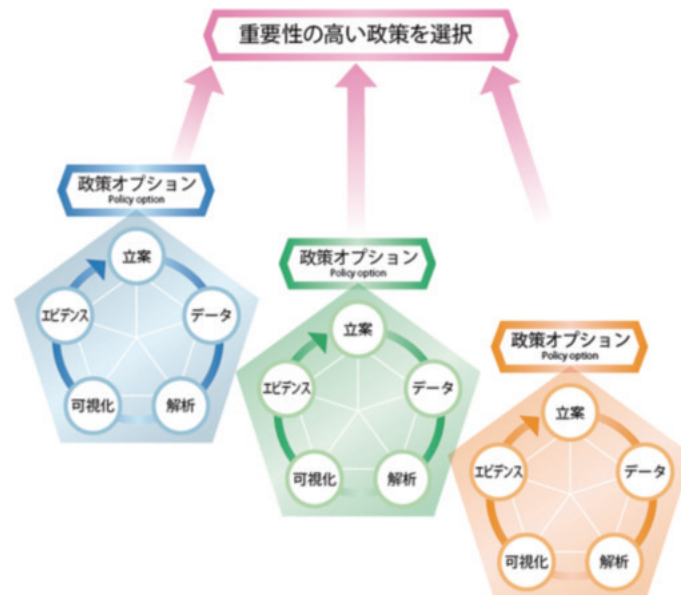


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

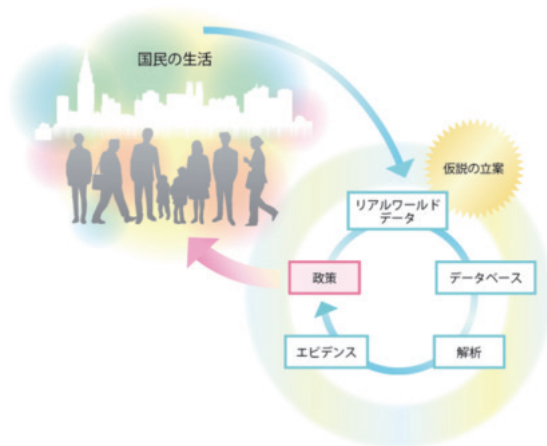


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

## 京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

### 研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

2022 年度 在籍者数の合計：8 人(休学者含)

履修登録者数：2 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、公共政策教育部：1 人）

修了者数：3 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：1 人）

\*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

#### 参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

##### 2013 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

##### 2014 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）  
修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

##### 2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

##### 2016 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

##### 2017 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

##### 2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：2 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

##### 2019 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、農学研究科：2 人、医学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

##### 2020 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 公共政策教育部：3 人、医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）

修了者数：3 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、博士課程在学中：2 人）

##### 2021 年度

履修登録者数：3 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、農学研究科：2 人）

修了者数：2 人（進路内訳 マスメディア：1 人、民間企業：1 人）

## 学際プログラム履修コース（修了要件8単位以上）

2022年度 在籍者数の合計：10人

履修登録者数：6人（所属研究科内訳 経営管理教育部：1人、工学研究科：1人、公共政策教育部：3人、人間・環境学研究科：1人）

修了者数：6人（進路内訳 中央省庁：2人、公務員：1人、民間企業：1人、博士課程在学中：1人、博士課程進学：1人）

\*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

### 参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

#### 2019年度

履修登録者数：4人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1人、医学研究科：2人、農学研究科：1人）

修了者数：1人（進路内訳 博士課程在学中：1人）

#### 2020年度

履修登録者数：6人（所属研究科内訳 医学研究科：3人、情報学研究科：1人、総合生存学館：1人、農学研究科1人）

修了者数：4人（進路内訳 政府・公的研究機関：1人、民間企業：1人、進学：1人、不明：1人）

#### 2021年度

履修登録者数：4人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2人、農学研究科：1人、総合生存学館：1人）

修了者数：7人（進路内訳 中央省庁：1人、シンクタンク：1人、民間企業：1人、博士課程在学中：2人、一貫制大学院在学中：1人、博士課程進学：1人）

## 京都大学「政策のための科学」プログラム 開講科目一覧（2022年度）

科目カテゴリー	授業科目名	主担当教員（研究科）	単位	学期	
入門必修科目	現代社会と科学技術 B	川上 浩司（医学研究科）、他	2	後期	
必修科目（※）	科学技術コミュニケーション演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	通年	
連携必修科目（※）	研究プロジェクト	川上 浩司（医学研究科）、他	2	通年	
選択科目Ⅰ： 基軸科目群(1科目以上選択)	現代社会と科学技術 A	川上 浩司（医学研究科）、他	1	前期	
	政策のための研究方法論	カール・ベッカー（政策のための科学ユニット）	2	前期	
	現代規範理論	森川 輝一（公共政策大学院）	2	前期	
	共生社会環境論演習 4A	広井 良典（人と社会の未来研究院）	2	前期	
	ビッグデータ分析による問題解決実践	小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2	前期	
	科学技術イノベーション政策特別演習	川上 浩司（医学研究科）、他	1	夏期集中	
	科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング	伊勢田 哲治（文学研究科）	2	後期	
	科学的可視化	小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2	後期	
	共生社会環境論演習 3B	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期	
	共生社会環境論演習 4B	広井 良典（人と社会の未来研究院）	2	後期	
	公共政策論Ⅰ	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期	
	選択科目Ⅱ： インシュア科目群 (1科目以上選択)	経済原論Ⅰ(応用ミクロ経済学)	伊藤 順一（農学研究科）	2	前期
		情報社会論	大手 信人（情報学研究科）	2	前期
		デジタルガバメント論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
		FinTech 概論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
		プログラミング演習(Excel VBA)	小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2	前期
		疫学Ⅰ(疫学入門)	中山 建夫（医学研究科）	1	前期前半
		文献評価法	中山 建夫（医学研究科）	1	前期後半
		科学技術イノベーション政策総合演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	夏期集中
医療政策の ELSI		カール・ベッカー（政策のための科学ユニット）	2	後期	
応用経済学		依田 高典（経済学研究科）	2	後期	
健康情報学Ⅰ		中山 建夫（医学研究科）	2	後期	
まちづくりとまち経営		要藤 正任（経営管理大学院）	2	後期	
医薬政策・行政		川上 浩司（医学研究科）	1	後期前半	
医薬品の開発と評価		川上 浩司（医学研究科）	1	後期後半	

※ 研究プロジェクトコースのみ必修



## 🍁 京都大学 特色ある授業

### 「現代社会と科学技術 A」(前期 木曜 1 限)、「現代社会と科学技術 B」(後期 木曜 4 限)

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度より体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2022 年度の「現代社会と科学技術 A」と「現代社会と科学技術 B」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士のディスカッションを行いました。

#### 「現代社会と科学技術 A」

第 1 回 (2022 年 5 月 12 日) 宮野 公樹 (京都大学 准教授)

大学における学問とは? 分野融合・越境のダイナミクス

第 2 回 (2022 年 5 月 19 日) 小山田 耕二 (京都大学 教授)

科学的方法について

第 3 回 (2022 年 5 月 26 日) カール・ベッカー (京都大学 特任教授)

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 4 回 (2022 年 6 月 2 日) 要藤 正任 (京都大学 特定教授)

まちづくり・地域づくりとソーシャル・キャピタル

第 5 回 (2022 年 6 月 9 日) 南 真祐 (京都大学 准教授)

科学技術・イノベーション政策等について

第 6 回 (2022 年 6 月 16 日) 全教員

10 期生研究課題発表会

第 7 回 (2022 年 6 月 23 日) 田淵 敬一 (文部科学省)

社会と科学の関わり方

第 8 回 (2022 年 6 月 30 日) 岩下 直行 (京都大学 教授)

ビットコインにおける非中央集権の理想と現実

第 9 回 (2022 年 7 月 7 日) 間宮 弘晃 (京都大学 特命講師)

高騰する薬剤費と医療保険制度

第 10 回 (2022 年 7 月 14 日) 中山 健夫 (京都大学 教授)

医療の経済評価: その現状と課題

第11回(2022年7月21日) 全教員

研究プロジェクト中間発表

### 「現代社会と科学技術 B」

第1回(2022年10月6日) 川上 浩司(京都大学 教授)

健康福祉政策と情報の利活用

第2回(2022年10月13日) 小山田 耕二(京都大学 教授)

データ可視化と政策立案

第3回(2022年10月20日) 全教員

研究プロジェクト中間発表会

第4回(2022年10月27日) 伊勢田 哲治(京都大学 准教授)

クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会

第5回(2022年11月10日) 佐野 亘(京都大学 教授)

価値の対立と合意形成

第6回(2022年11月17日) 平川 秀幸(大阪大学 教授)

責任ある研究・イノベーションとは何か

第7回(2022年11月24日) 瓜生原 葉子(同志社大学 教授)

移植医療の社会的価値

第8回(2022年12月1日) 大手 信人(京都大学 教授)

森林の生態系サービスと政策

第9回(2022年12月8日) 広井 良典(京都大学 教授)

持続可能性と人口減少社会のデザイン

第10回(2022年12月15日) 依田 高典(京都大学 教授)

「政策のための科学」の計量書誌学データ分析

第11回(2022年12月22日) 伊藤 順一(京都大学 教授)

日本型直接支払制度の政策評価とその方法

第12回(2023年1月5日) 後藤 励(慶應義塾大学 教授)

医療費の増加と医療技術評価

第13回(2023年1月12日) 富田 直秀(京都大学 名誉教授)

質の評価: アートの視点から

第14回(2023年1月19日) 宮野 公樹(京都大学 准教授)

振り返りワークショップ

## ❖ 合同講義

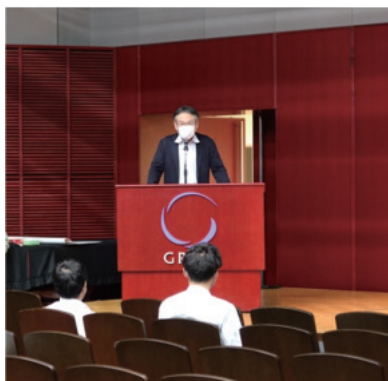
### 「科学技術イノベーション政策総合演習」(集中講義 [夏])

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つである SciREX サマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしてきました。

事前ワークショップは、8月9日（火）10:30～16:00の日程で大阪大学と京都大学合同で実施しました。事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田 直樹さんと岩田 花奈さんにお願ひしました。サマーキャンプ本番でより良い対話や活動ができるようになることが目的です。今年度は「コワーキングスペースを作る（デザインする）」というテーマでグループワークを行いました。4～5人のグループごとに話し合ってコンセプトデザインを考え、会場内にある備品を活用してスペースを作ってみました。グループごとに目指したことや工夫した点などを発表した後で、他のグループの考えたスペースを使ってみて、その感想や改善のアイデアなどをシェアしました。そこで出された意見などを通して、対話の場作りについて考えを深めました。



その後、9月2日（金）からサマーキャンプに参加しました。9月2日から4日にかけてのサマーキャンプは政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは学生9人と教職員3人、実行委員1名、京都大学からは学生6人と教員3人、実行委員2名が参加しました。



サマーキャンプのプログラムに関しては、「SciREX 事業への参画（本冊子 42 ページ以降）」で詳しくご紹介しています。

### 「研究プロジェクト」（通年）

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの（日英可）を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2022 年度の合同発表会は、2022 年 12 月 3 日に大阪大学豊中キャンパスのシグマホールにて、大阪大学 2 人と京都大学 3 人の合計 5 人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

### 2022 年度（口頭発表会：2022 年 12 月 3 日 大阪大学豊中キャンパスシグマホールにて）

#### 大阪大学

- (1) 日本の理系女性研究者の増加を推進する政策—女子中高生の理系進路選択に関する取り組みに注目して—
- (2) 日本における博士後期課程学生への公的経済支援制度の史的変遷—日本学術振興会特別研究員制度は失敗だったのか?—

#### 京都大学

- (1) 林業大学校の現状と課題に基づく学生募集活動の提案—インターネット・SNS、オープンキャンパス、高校訪問に焦点を当てた分析—
- (2) 官民イノベーションプログラムの目的と実際の投資状況
- (3) 日本のパーム油依存を減らすための政策案

#### 参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

##### 2013 年度（口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

###### 大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム—「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

##### 2014 年度（口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて）

###### 大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編—エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション—人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査—先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察—NL マークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」—福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件—習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR—企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

#### 京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 —社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 —医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床—応用—への実現に関する調査研究—
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定—選択型実験による接近—
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化—レセプトデータベースを用いた疫学的研究—

#### 2015年度（口頭発表会：2016年2月13日 京都大学楽友会館にて）

##### 大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望—大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として—
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化—科学技術社会論と古典的自由主義の融合—
- (3) 日本における核融合研究と政策—歴史、現状、そして今後に向けて—
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて—DNA型証拠と足利裁判—
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査—大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認—

##### 京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析—大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える—
- (2) 問題解決における現場地の重要性—自転車シェア事業を手掛かりに—
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望—新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に—
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

#### 2016年度（口頭発表会：2016年12月10日 大阪大学中之島センターにて）

##### 大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 —若手研究者に対する探索的調査—
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 —日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて—
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について —物理分野を中心に—
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 —ユーザー参加の視点から—
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 —過去の河川計画を例として—
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 —偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」—

##### 京都大学

- (1) 日本におけるベルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策—奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に—
- (4) 自治体議員の研修に関する考察—評価グリッド法を用いた分析—
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

#### 2017年度（口頭発表会：2017年12月9日 京都大学楽友会館にて）

##### 大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 —文献調査とインタビュー調査による探索的研究—
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 —因果関係の判定条件と規範的・価値的含意—
- (4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 —現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて—
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 —サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について—

##### 京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 —韓国の全国紙の社説を中心に—
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 —大規模災害時のSNSによる情報発信手法の検討—
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 —福島第一原子力発電所事故を例に—
- (4) 地域公共交通改革の事例分析 —地域の持続的な移動手段確保に向けて—
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究—健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る—

#### 2018年度（口頭発表会：2018年12月8日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 大学におけるデュアルユース研究 ―「対話ツール」を利用した学生との議論―
- (2) “個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査 ―兵庫県を事例として―

京都大学

- (1) 指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴 ―文献検索数を用いた記述研究―
- (2) 福祉政策による社会環境変化と精神障害者のQOLとの関連 ―統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究―
- (3) 塩酸リトドリンの早産予防効果 ―データベースを用いた検討―
- (4) 市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討 ―サイエンスカフェの事例分析から―

#### 2019年度（口頭発表会：2019年12月14日 京都大学芝蘭会館別館にて）

大阪大学

- (1) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討―革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）を題材として―
- (2) 生命倫理への関心度の決定要因―情報収集行動を中心に―
- (3) 博士課程進学を選択する要因の調査―大阪大学大学院生命機能研究科における事例から―
- (4) 原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響―大阪大学大学院工学研究科を対象として―

京都大学

- (1) 京都市営バス路線ネットワークの最適化
- (2) 農業輸出における行政の役割と課題

#### 2020年度（口頭発表会：2020年12月12日 オンラインにて）

大阪大学

- (1) 日本のスマートシティ関連事業における府省庁連携―中央府省庁と地方自治体の視点から―
- (2) 高度教養教育に関する学習動機分析―大阪大学高度副プログラムにおける調査から―
- (3) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程―戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)を事例として―
- (4) プラスチック資源循環の実現に向けた課題の検討―レジ袋有料化を事例として―
- (5) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)における台湾政府と市民の科学コミュニケーション―記者会見のインターネットライブ中継に伴う課題―
- (6) 科学に関する市民参加の課題と、その解決に向けた実践形態の模索―大阪NO<sub>2</sub>一斉測定運動を事例に―
- (7) 要介護・要支援認定における医学的評価の在り方―主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析―

京都大学

- (1) 外国人介護人材向けの介護のテキストの量的分析―介護現場での円滑なコミュニケーションを目指して―
- (2) 日本における女性の出産施設選択の嗜好―システムティックレビュー―
- (3) 多職種連携@精神科―質向上サイクルワーク―
- (4) 「見守り活動」への学生参加を増やせるか?―京都市と草津市の事例を対象に―
- (5) 農業大学校における環境保全型農業の実践についての提案―SDGsの達成を目指して―

#### 2021年度（口頭発表会：2021年12月4日 オンラインにて）

大阪大学

- (1) 環境除染目的の日用品に対する日本のガバナンスの特徴と課題―除菌を騙る製品はなぜ流通するのか―
- (2) スタートアップ・エコシステム拠点形成における大学の役割―大阪大学の取り組みを例に―
- (3) 宇宙科学・探査プロジェクトの政策過程―深宇宙探査技術実証機 Destiny+計画を例に―
- (4) 中等教育の場で理科教員が教える地学の現状と支援に向けた提案
- (5) 化学系研究室における学生の学習過程の調査―正統的周辺参加論の枠組みから―

京都大学

- (1) 日本における都市部高齢者の Aging in Place 実現に向けたボランティア活動奨励制度の検討
- (2) 日本の自粛政策の経済的コストと損失余命
- (3) 日本企業に就職した元留学生の直面する日本語コミュニケーション上の問題―中国人留学生を対象に―
- (4) 鉄道における時間帯別運賃政策の国際比較研究―日本版時間帯別運賃政策に向けて―

## 阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術B」において、大阪大学の平川秀幸教授が、選択科目「医療政策のELSI」において、加藤和人教授が講師を務めました。

また、大阪大学の選択科目「科学技術コミュニケーション入門B」において祐野恵特定助教が講師を務めました。

## ❖ 阪大学生の声

多様な視点を得て、新たな視点を提供する経験ができました。

高橋 可恋さん（人文学研究科 外国学専攻 博士後期課程 1年）

大学院に入学した当初、私のなかに「社会の中で自分の研究はどのように役に立つのか」という気持ちがありました。そんな時、STiPSの授業で接した理系の人が「一般の人にもっと科学に興味を持ってもらうにはどうしたらいいのか」と話してくれることがあり、私たち文学の人間が持っている悩みと近いと感じました。自分の研究が社会にどう役立つのかと考えることも、文系・理系関係なく、研究に取り組んでいる人に共通のことなのかもしれない、と考えるようになりました。

STiPSの授業で特に印象に残っているのは、「科学技術コミュニケーション演習」の顔認証技術についてのディスカッションです。私の専門は南米文学なので、その作品が書かれた国の政治状況について考える機会が多く、「独裁的な政治状況の国において、顔認証のような技術は、思想の取り締まりなど政治的悪用につながる可能性がある」と話しました。すると、グループのメンバーから「そういう視点もあるのか」という反応があったのです。文学が社会にどう役立つかという点において、このように新たな視点を提供するという役割もあるのだな、と実感した経験でした。



専門を活かし、自分と社会とのつながり方を見つけることができました。

東 佑貴さん（理学研究科 宇宙地球科学専攻 博士前期課程 1年）

STiPSの授業「科学史・科学哲学入門」の4,000字のレポートは、私にとってなかなか大変なものでしたが、鍛えられました。私はいままで、一つのテーマについて自ら問いをたててこれほどの量の文章を書くという経験がほとんどありませんでしたが、授業をとおして自分の思考のプロセスをまとめる力がついたと思います。

私は、常々、自分自身の研究と社会が直接つながっているという感覚を持ちにくいと感じていました。一方、私個人としてはずっと社会と科学のつながりに関心があり、STiPSの「科学技術と社会をつなぐ」というコンセプトに興味を持ち、履修を決めたという経緯があります。実は今も、相変わらず自分の専門分野や研究テーマと社会との距離があるように感じてはいるのですが、ここまでSTiPSで学んできたことを通して、私が個人として社会とつながる部分はたくさんある、と捉えるようになりました。私は今、将来教師という道に進むのもいいな、と考え始めています。自分が持っている科学的知識を深めながら、これからの未来を担う子どもたちにそれらを教えるというのは、社会と科学をつなぐ方法のうちの一つだと改めて感じています。



STiPS での経験をとおして多様な現象や人をつなぐ面白さを実感できました。

坂部 拓実さん（情報科学研究科 情報数理学専攻 博士前期課程 1年）

「科学技術イノベーション政策総合演習(サマーキャンプ)」での「データの利活用における『同意』」というディスカッションのテーマは、非常に興味深いものでした。企業や行政が、どのようなデータを集めるのかということだけに注意を払うのでは不十分で、データを提供してくれる一人一人から同意をとる必要がある。個人情報に紐づいたデータを扱う難しさを改めて感じました。集めたデータを自由に扱うためには、さまざまな乗り越えるべきハードルがあることを今まで以上に意識するようになりました。

STiPS の授業では多様な人が参加しているのが面白いと思いました。研究室の人との議論は、概念や専門用語がある程度共有されていることが前提となりますが、異なる背景を持つ人と議論をすると、そんな考え方があるのだな、と感じることが多いです。自分とは根本的に異なる視点でものを見ている人がいることを体感できるのは貴重だと思います。今、組織のなかで異なる価値観のひとをつなぐ、という仕事に興味を持っているのですが、それは STiPS での経験に影響を受けた部分もあるのかもしれない。





## 🍷 京大学生の声

### 政策のための科学(STiPS)はきっかけにあふれている

木村 綾奈さん (医学研究科 社会健康医学系専攻 博士前期課程 2年)

私の場合、あるきっかけを起点に思考や行動が一気に広がる傾向にあります。STiPS から得られた大きなきっかけは「学びの本質への接近」、「教員陣との交流」、「修了の肩書」でした。

学びの本質の一部として、大学が院生に修得させたいのは、自主的な問いの立て方と答えを出すまでの正しい探求方法です。修士課程以降は、研究成果はもとより研究テーマの設定に、想像以上に心を砕き、砕かれます。その過程の練習として、STiPS の講義や同期との対話、そして甘えがちな自分を引き締める研究プロジェクトは有難かったです。矛盾しますが、積極的に STiPS を受講すると、受動的に学びの本質に近づく環境にいられるのです。

また、副専攻に主体的に関わって下さる教員陣は主に優しく、時に鋭い。当然ながら優秀な先生方と、襟を正し精一杯背伸びをしてお話するのは純粋に楽しいものです。笑顔の傍ら、未来の自分に繋がる思考、話し方、生き方を模索することもできます。

修了の肩書は、同期や先生方とは頑張った！という共通言語として、まだ見ぬ先輩や関係各位とは新しい繋がりとして重宝するはずで。

これらのきっかけをどのように広げて生かしていけるのか、今から心が高鳴っています。



## STiPS 修了生ネットワーキング

### STiPS 修了生と現役生との交流会（大阪大学）

2022年5月18日（水）18時30分から、現役生と修了生の交流会を開催しました。オンライン形式で実施し、STiPS 関連教員も参加して23人が集い、近況などを語り合いました。





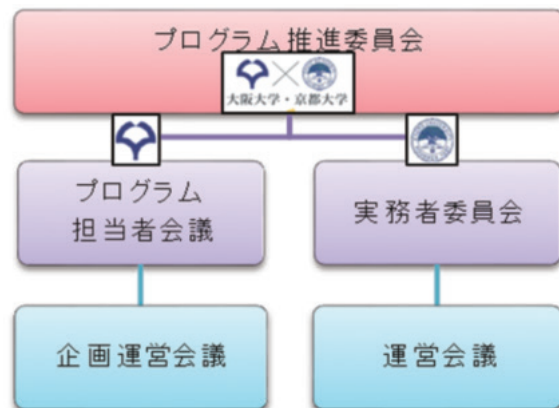
## 2. プログラム推進委員会の運営

---

## 2. プログラム推進委員会の運営

### ❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



### 阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012年より、毎年3回から4回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。

2022年度は計3回（6月21日、9月14日、2月15日）実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプなどの拠点間同事業に関する調整を行っています。

### 各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

### 各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にCOデザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

## ❖ アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。第二期アドバイザー・メンバーは5名で構成されています。

## ❖ カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 21、うち新設科目数は 7 でしたが、2014 年度の開講科目数は 30、うち新たに追加した科目数は 9 となりました。2015 年度の開講科目数は 29、2016 年度の開講科目数は 32 でした。2017 年度には、4 学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は 36 になり、2018 年度の開講科目数は 37、2019 年度の開講科目数は 40、2020 年度の開講科目数は 40、2021 年度の開講科目数は 39、そして 2022 年度の開講科目数は 35 でした。

京都大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目追加し 23 科目となり、2015 年度の開講科目数は 23、2016 年度の開講科目数は 25、2017 年度の開講科目数は 23、2018 年度の開講科目数は 27、そして、2019 年度の開講科目数は 28、2020 年度の開講科目数は 30、2021 年度の開講科目数は 27、そして 2022 年度の開講科目数は 28 でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

## ❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

### 「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

- 【第96回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2022年度夏）第1回  
パナソニックホールディングス株式会社 白瀧浩志さん
- 開催日：2022年6月21日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学フェローシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェローシップ  
\*授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
- 【第97回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2022年度夏）第2回  
愛媛県南予地方局健康福祉環境部 大内詩野さん
- 開催日：2022年6月28日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学フェローシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェローシップ  
\*授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
- 【第98回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2022年度夏）第3回  
株式会社資生堂 みらい開発研究所 山脇竹生さん
- 開催日：2022年7月5日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学フェローシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェローシップ  
\*授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
- 【第99回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2022年度夏）第4回  
株式会社三菱総合研究所 吉田篤さん
- 開催日：2022年7月12日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学フェローシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェローシップ  
\*授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。

- **【第 100 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）第 5 回**  
京都大学 学際融合教育研究推進センター 祐野恵さん
- 開催日：2022 年 7 月 19 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学フェローシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェローシップ  
\*授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
  
- **【第 101 回 STiPS Handai 研究会】シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度夏）第 1 回**  
原子力政策の歴史から学ぶ科学技術と日本社会の構造
- 開催日：2022 年 7 月 4 日
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター  
\*授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
  
- **【第 102 回 STiPS Handai 研究会】シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度夏）第 2 回**  
科学技術・イノベーション政策の現状と課題
- 開催日：2022 年 7 月 11 日
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター  
\*授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
  
- **【第 103 回 STiPS Handai 研究会】シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度冬）第 1 回**  
日本のデジタル庁と公共政策
- 開催日：2023 年 1 月 5 日
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター  
\*授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。
  
- **【第 104 回 STiPS Handai 研究会】シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度冬）第 2 回**  
日本の安全保障政策と宇宙政策
- 開催日：2023 年 1 月 12 日
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター  
\*授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。



- **【第105回 STiPS Handai 研究会】シリーズ 科学技術×公共政策（2022年度冬）第3回 競争から協力へー米露宇宙関係の展開**

- 開催日：2023年2月9日
  - 実施形態／場所：オンライン形式
  - 主催：STiPS
  - 共催：大阪大学 CO デザインセンター
- \* 授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。

- **【第106回 STiPS Handai 研究会】“Science Communication”の学び方**

- 開催日：2023年2月27日
- 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学大学院人文学研究科 人文学専攻 科学技術社会論専門分野
- 協力：大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSIセンター）、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター（SLiCSセンター）

## 共進化実現プログラム（第IIフェーズ）の一環として開催

- **社会課題専門家ワークショップ「①超高齢化社会に向けたAI・ロボット・ICTで変わる働き方」**

- 日時：2022年10月20日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」

- **社会課題専門家ワークショップ「②みんなで食べ続ける食と農のあり方」**

- 日時：2022年10月21日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」

- **社会課題専門家ワークショップ「③光り輝くサイバー社会が生み出す闇を破る」**

- 日時：2022年10月24日
  - 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」

- **サイエンスアゴラ「思い描いてみよう！未来のじぶんの一日」**

- 日時：2022年11月5日
- 実施形態／場所：テレコムセンタービル
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」

### 3. SciREX 事業への参画

---

## 3. SciREX 事業への参画

### 🍁 サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

#### 2022 年度

実施日：2022 年 9 月 2 日から 4 日

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学、九州大学

参加者数：大阪大学からは学生 9 人と教職員 3 人、実行委員 1 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人、実行委員 2 人

#### 参考資料：過去のサマーキャンプの情報

##### 2013 年度

実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

##### 2014 年度

実施日：2014 年 8 月 31 日から 9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

##### 2015 年度

実施日：2015 年 8 月 21 日から 8 月 23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

##### 2016 年度

実施日：2016 年 9 月 15 日から 17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

##### 2017 年度

実施日：2017 年 8 月 20 日から 22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

##### 2018 年度

実施日：2018 年 8 月 28 日から 30 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 4 人、京都大学からは学生 4 人と教員 5 人

##### 2019 年度

実施日：2019 年 8 月 26 日から 28 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学  
 主催拠点：政策研究大学院大学  
 参加者数：大阪大学からは学生 14 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

#### 2020 年度（中止）

予定されていた実施日：2020 年 9 月 17 日から 19 日  
 予定されていた会場：国立オリンピック記念青少年総合センター  
 主催拠点：政策研究大学院大学、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

#### 2021 年度

実施日：2021 年 9 月 3 日から 5 日  
 会場：オンライン開催  
 主催拠点：政策研究大学院大学、一橋大学  
 参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 6 人、京都大学からは学生 8 人と教員 3 人

## 2022 年度の体制

主催：文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課、SciREX 基盤的研究・人材育成拠点、SciREX センター  
 幹事校：九州大学 CSTIPS、政策研究大学院大学 GiST、SciREX センター

## 2022 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

### 「多様な価値観と向き合う政策立案」

情報技術の発展、グローバル化、長寿社会、エネルギー問題……我々はいま、人々の生き方を変革するような大きなイノベーションや課題に直面している。それらに対応する政策についても、人々のライフスタイルに大きな影響を与えかねず、いかに人々の納得や理解を得るかがますます重要になってきている。そこで、多様な価値観や立場のアクターとコミュニケーション・参画を図りながら、科学的なエビデンスに基づいて立案・実行する方法について、実践的に検討することを目的に、本テーマを設定する。



## サマーキャンプのプログラム

	9月2日（金）	9月3日（土）	9月4日（日）
午前		9:00-12:10 グループワーク	9:00-12:10 グループワーク 発表準備
午後	13:00-14:30 オリエンテーション 14:45-18:00 グループワーク	13:00-14:30 グループ間交流 14:30-18:00 グループワーク	13:00-18:00 最終報告会 講評・表彰・閉会挨拶

## グループワーク（プログラムより）

E1：Space Policy

メンター：Quentin VERSPIEREN（東京大学）

E2：Citizen participation concept in policy making process

メンター：Noel KIKUCHI（CRDS）

J1：高齢者支援の将来像とライフスタイルの変化

メンター：永田 晃也（九州大学）

J2：多様な価値観に基づく脱炭素社会の実現

メンター：Carl BECKER（京都大学）

J3A：多様な価値観に配慮したエネルギー戦略

メンター：李 孝連（一橋大学）

J3B：多様な価値観に配慮したエネルギー戦略

メンター：小泉 秀人（一橋大学）

J4：起業・スタートアップが変える、未来社会

メンター：金 柄式（一橋大学）

J5：データ利活用とその社会受容

メンター：鹿野 祐介（大阪大学）

J6：多様な活躍を支える高度人材育成のあり方

メンター：安田 聡子（九州大学）

J7：多様性社会のための教育と生涯学習社会の実現

メンター：小林 俊哉・栗山 康孝（九州大学）

## 他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が2022年7月16日にはGRIPSの授業政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラムが提供する科目「科学技術イノベーション政策概論」において、科学技術の社会的ガバナンスについて論じました。2022年10月22日には、九州大学 CSTIPS が提供する科目「科学技術社会論概説」において、STiPS の教育カリキュラムを紹介した上で、科学技術社会論（STS）について論じました。2022年11月2日には、東京大学 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット（STIG）が提供する科目「事例研究（科学技術イノベーション政策研究）」において、科学技術と社会について論じました。他にも大阪大学の渡邊浩崇特任教授が2022年12月17日に九州大学 CSTIPS が提供する科目「科学技術社会論概説」において、ビッグサイエンスとしての日本の宇宙政策について論じました。

## コアコンテンツ作成、行政官研修などへの講師派遣

「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツの作成として、これまでに主に第3章「科学技術イノベーションと社会」の執筆を担当しました。今年度は引き続き編集会議に参加しました。

2022年12月12日に文部科学省・SciREX ブラウンバッグセミナーにおいて、大阪大学の小林傳司名誉教授が「総合知が求められる時代と人材育成」と題する講演を行いました。

2023年1月10日に行われた科学技術イノベーション政策に関する行政官研修には大阪大学の小林傳司名誉教授が講師として参加し、科学技術イノベーションと社会、ガバナンスについての講演と議論を行いました。



## 4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

---



## 4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様なテーマで研究会を実施してきました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2022 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

### STiPS Handai 研究会（シリーズ「科学技術×公共政策」ほか）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

本シリーズは、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーです。科学技術の進展が人々の生活や社会に幅広い影響をもたらす現代において、科学技術に関する公共政策はどのような特徴があり、どのように立案、決定、実施、そして評価されるのか。人文科学、社会科学、自然科学などの専門を問わず、科学技術だけでなく公共政策に対する理解が求められています。科学技術に関する公共政策について、文系理系の両方の観点から考えました。

## 第 101 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度夏） #1 原子力政策の歴史から学ぶ科学技術と日本社会の構造
- ゲスト：鈴木 達治郎（長崎大学核兵器廃絶研究センター 教授）
- 日時：2022 年 7 月 4 日（月） 15:10～18:20
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日は、講師や司会進行、授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、その他の参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 18 人が参加しました。

今回は、長崎大学核兵器廃絶研究センターの鈴木達治郎教授をゲストにお迎えしました。戦後日本の原子力政策について、ご講演いただきました。



研究会の前半は、日本の原子力政策や体制の歴史とともに、事例として、高速増殖炉（FBR）の開発と挫折、青森六ヶ所村再処理問題、福島原発事故と核燃料サイクル見直し論議、福島原発事故後の原子力政策などについて、ご説明いただきました。

後半は質疑応答とディスカッションを行いました。鈴木教授が提示された論点、「国内外の情勢が大きく変わってきているのに、なぜ原子力政策は根本的に変化していないのか」、「国の研究開発政策、科学技術政策の中で、原子力の研究開発は特別なのか、特別である理由はあるか」、「福島事故の教訓を日本は学んでいると思うか」などについて、参加者からは様々な意見や関連した質問が出されました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（\*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「科学技術リスクと社会との信頼関係を調整するためには、政策策定の透明性が重要であると感じました。」

「原子力のような科学技術に関して、信頼できる情報とは何かを考えさせられ、信頼できる情報を発信することの重要さと難しさを感じました。」

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2022/000914.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 第 102 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度夏） #2 科学技術・イノベーション政策の現状と課題
- ゲスト：赤池 伸一（文部科学省 科学技術・学術政策研究所 上席フェロー）
- 日時：2022 年 7 月 11 日（月）15:10～18:20
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日は、講師がオンラインでの参加となったこともあり、司会進行と授業の履修生、そしてその他の参加者もオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 16 人が参加しました。

文部科学省科学技術・学術政策研究所上席フェローの赤池伸一さんをゲストにお迎えし、科学技術イノベーション政策の体制と最近の動向について、ご講演いただきました。研究会の前半は、日本や諸外国の科学技術イノベーション政策の体制や内容、日本の科学技術イノベーションの国際的ポジション、現在の日本の科学技術イノベーション政策の制度と課題などについて、ご説明いただきました。



後半は質疑応答とディスカッションを行いました。とくに、日本の第 5 期科学技術・イノベーション基本計画（2016 年 4 月～2021 年 3 月）の成果と課題として、研究力強化に関する質問や感想が多く出されました。日本は近年、大学における博士課程進学率の減少、若手研究者の安定的ポストの減少、大学の資金の乏しさ、優れた論文数等の国際的地位の低下などに苦しんできました。それらへの対策が第 5 期期間に打ち出されて、2021 年 4 月からは第 6 期基本計画が開始されました。参加者からは、それらへの対策としての若手支援パッケージ（博士課程学生フェローシップ等）、大学運営費交付金改革、10 兆円規模の大学ファンドなどに関して、様々な質問や感想が述べられました。赤池さんからそれぞれ丁寧にお答えいただきました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（\*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「内閣府や文部科学省が、日本の科学技術イノベーション政策にどのように取り組んでいるかを知ることができた。」  
「大学運営の法人化について、実際に政策を行ってきた官僚の方から意見をお伺いしたのが初めてで興味深かった。」  
「日本の大学の博士課程進学者数が減少していることについて、より多くの人が遠慮なく博士課程に進学できる社会環境と大学環境を整備することが最も大切であると思いました。」

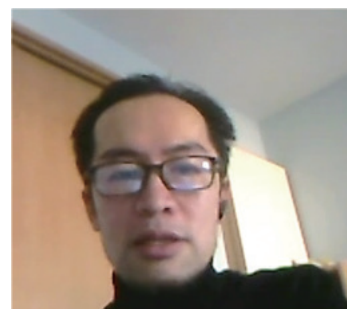
CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2022/000915.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 第 103 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度冬） #1 日本のデジタル庁と公共政策
- ゲスト：中川 尚志（デジタル庁 企画官）
- 日時：2023 年 1 月 5 日（木）15:10～18:20
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日は、司会進行と参加者の一部は豊中キャンパスの教室に集い、講師とその他の参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生（11 人）に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 22 人が参加しました。

今回は、デジタル庁 企画官の中川 尚志氏をゲストにお迎えし「日本のデジタル庁と公共政策」についてご講演いただきました。



研究会の前半は、デジタル社会の形成に関する司令塔として 2021 年 9 月に発足したデジタル庁について、ご説明いただきました。特に、教育政策のデジタルトランスフォーメーション（DX）、学校教育現場や民間企業、デジタル庁や文部科学省とのデータ連携について、詳細にお話しいただきました。

後半は、質疑応答とディスカッションを行いました。中川氏が提示された論点、「DX によって政策形成が変わるか」、「制度に合わせてデジタル化するか、デジタル化の上で政策を実行するか」などについて、参加者からは様々な意見や関連した質問が出されました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（\*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「デジタル庁が教育政策にこれほど踏み込んでいるということに驚きました。」

「どこまで進めば DX が達成できると言えるのかについて関心がありましたが、その見通しが得られました。」

「デジタル庁には民間出身の方が多く在籍していると聞いていたが、行政官と民間出身者が共同して働くことの意義が理解できました。」

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2023/001056.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 第104回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2022年度冬） #2 日本の安全保障政策と宇宙政策
- ゲスト：橋本 靖明（防衛省防衛研究所 主任研究官）、佐藤 雅彦（宇宙航空研究開発機構（JAXA） 評価・監査部長）
- 日時：2023年1月12日（木）15:10～18:20
- 実施形態／場所：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日は、司会進行と2名のゲスト、参加者の一部が豊中キャンパスの教室に集い、その他の参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生（10人）に加えて、大阪大学の教職員や学生など計20人が参加しました。

今回は、防衛省防衛研究所 主任研究官の橋本靖明氏と宇宙航空研究開発機構（JAXA）評価・監査部長の佐藤雅彦氏をゲストにお迎えしました。それぞれ「日本の安全保障政策の歴史」、「宇宙と国際政治—アルテミス時代の法政策」についてご講演いただきました。



研究会の前半は、橋本氏より日本の安全保障政策の歴史とともに、2022年12月に策定された国家安全保障戦略を始めとする「安保3文書」についてご説明いただきました。また、佐藤氏には、国際的な月探査計画である「アルテミス計画」とそれを契機として宇宙活動を促進する政治的宣言である「アルテミス合意」について、宇宙法の観点からお話しいただきました。



後半は質疑応答とディスカッションを行いました。橋本氏や佐藤氏が提示された論点、「現在と将来の国際安全保障の懸念とは何か」、「日本は単独で安全を確保できるのか」、「月探査先行国と後発国の利益の調整方法」などについて、参加者からは様々な意見や関連した質問が出されました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（\*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「日本の安全保障政策において、自衛隊がこれまで国際状況にどのように対応してきたのか、そして現在、宇宙やサイバーという分野がいかに重要になっているかが理解できました。」

「各国や民間の月面探査がよくニュースで取り上げられていますが、将来の月面における民間の企業活動について、具体的なイメージがわかりました。」

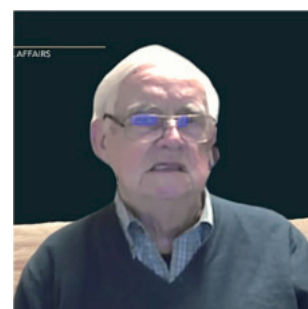
CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2023/001054.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 第 105 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2022 年度冬） #3 競争から協力へー米露宇宙関係の展開
- ゲスト：ジョン・M・ログスドン（米国ジョージ・ワシントン大学 名誉教授）
- 日時：2023 年 2 月 9 日（木）10:00～12:00
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日はオンライン形式で開催しました。ゲストのジョン・M・ログスドン氏は米国の首都ワシントン DC から、司会進行をつとめた渡邊 浩崇 特任教授は豊中キャンパスから参加しました。大阪大学の教職員や学生など計 10 人が参加しました。

研究会の前半は、今回ゲストにお迎えした米国ジョージ・ワシントン大学 名誉教授のジョン・M・ログスドン氏より、冷戦中、冷戦終結、そして冷戦後、米国とロシア（旧ソ連）の宇宙をめぐる関係がどのように変化してきたかについてご講演いただきました。



1957 年から 1991 年までの冷戦中、米国と旧ソ連は宇宙の主導権をめぐって競争してきたが、冷戦終結直後、1993 年にロシアがそれまでのそれぞれの宇宙ステーション計画を統合することを提案し、米国がその提案を受け入れたことにより、現在の国際宇宙ステーション（ISS）計画が誕生して現在に至っていることなどを、わかりやすくご説明いただきました。

研究会後半は質疑応答とディスカッションを行いました。ログスドン氏が提示された論点、「何が米露間の宇宙ステーション協力をまず可能にし、その後も持続的なものにしたのか。」「中国に、国際宇宙ステーション計画にある時点で参加するように呼びかけなかったことは失敗だったのか。」「宇宙における軍事的な競争は、これからの非軍事的な協力を不可能なものにするのか」などについて、参加者からは様々な意見や関連した質問が出されました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（\*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「米露間の宇宙分野における競争や協力の関係と、地上における政治的關係、これらの関係の歴史を初めて知りました。」

「これまでと現在の米露宇宙関係を教訓として、これからの米中宇宙関係を考えていこうと思いました。」

「米国宇宙政策に関する世界的権威である方のお話をお聞きし、また直接議論することができる大変貴重で贅沢な時間でした。」

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2023/001058.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 第 106 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：“Science Communication”の学び方
- ゲスト：Dr. Ayelet Baram-Tsabari (Professor of Science Education & Communication, Faculty of Education in Science & Technology, Israel Institute of Technology)
- 日時：2023 年 2 月 27 日 (月) 13:30～15:00
- 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
- 共催：大阪大学大学院人文学研究科 人文学専攻 科学技術社会論専門分野
- 協力：大阪大学 社会技術共創研究センター (ELSI センター)、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター (SLiCS センター)

2023 年 2 月 27 日 (月) に、STiPS Handai 研究会「"Science Communication"の学び方」を開催しました。

この日は CO デザインスタジオで開催し、阪大の教職員や学生など 18 人が参加しました。平川秀幸教授による趣旨説明に続いて、Dr. Ayelet Baram-Tsabari から話題提供をしていただきました。



まずは Topic1 として、Science communication and ELSI MOOCs というテーマで、edX 上で開講されているオンライン講座"Science Communication"について、プログラム開講の意図や、世界各地から参加しているプログラムの講師陣、プログラムの内容などをご紹介いただきました。

続いて Topic2 では、Ayelet-sensei's latest publication and Osaka University's science communication programs / classes というテーマで、昨年 9 月に発表された論文"How should we organize science communication trainings to achieve competencies?"から、科学コミュニケーションのトレーニングに関する研究についてご紹介いただきました。

参加の学生や教職員から、質問やコメントも次々と寄せられました。ご紹介いただいた手法が日本語でも使えるだろうか？、この捉え方は日本でも当てはまるだろうか？など、それぞれ参加者自身の関心に引きつけた議論も活発に交わされていました。

写真提供: 大阪大学 MOOC プロジェクト学生チーム

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2023/001068.html>) に開催レポートを掲載しています。

## 5. 共進化実現プログラムの実施

---



## 5. 共進化実現プログラムの実施

2021年度からは「共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ）」が始まりました。政策担当者と研究者とが対話をしながら研究課題を設定し、共に研究を進めるというものです。このうち2件（共進化実現ステージ2件）に、STiPS 参画教員が関わっています。

### 「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創

#### 研究課題名

「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創

#### プロジェクト期間

2021（R3）年6月～2023（R5）年3月

#### プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） \*研究代表者
- ・木見田 康治（東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻 特任講師）

#### 行政担当部署

文部科学省 科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室、人材政策課

#### 取り組む課題

我が国の科学技術政策において、その社会的妥当性（いわゆる正統性（Legitimacy））を担保するための取り組みは限定的です。さらに、異なるミッションの中のどれに取り組むか、研究分野としてどこに注力するかを政策判断するための手法は十分に確立されていません。そのためミッション指向型の研究開発戦略の策定において、ミッションの社会的妥当性の確保と研究成果の最大化を行うための理論的・方法論的基盤を共創的に研究・開発し、行政の戦略策定実務に実装することに取り組めます。

#### プロジェクト概要

将来社会のビジョンから抽出された重要な社会課題について、研究開発課題と結びつきうる具体的な「ミッション」を設定し、これをもとに研究開発戦略を立案する方法論を開発します。具体的には、研究者側は、木見田康治・東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻特任講師らのチームと連携し、行政側とは、文部科学省 科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室、人材政策課を主たる連携先とし、研究成果を同室が R3～4 年度に行う研究開発戦略の立案において活用します。さらに文部科学省 科学技術・学術政策局人材政策課、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の社会技術 研究開発センター(RISTEX)及び「科学と社会」推進部とも連携して進めます。

## 2022 年度の主たる研究成果

2022 年度は、5 つの社会課題ごとに市民ワークショップを開催し、将来に対する懸念や期待を対話に基づき抽出するとともに、社会課題と研究シーズのつながりに関して NISTEP 科学技術専門家ネットワークへのアンケート調査（送付数 1,663 名、回答者 825 名）を実施し、その結果概要を文科省が開発する研究開発ストリームにインプットしました。また、4 つの社会課題ごとに、関連する人文・社会科学系専門家を中心としたミニワークショップを 10 月 20、21、24 日に開催し、社会課題の整理・再定義等を行いました。この他、プロジェクトにおける議論内容を題材として、サイエンス・フィクション的要素を取り入れて、一般市民と議論・対話を行うワークショップを 11 月 5 日にサイエンスアゴラにて開催しました。最終成果としては、2024 年度以降のミッション誘発型の研究開発戦略の策定で活用されることを目的に「ミッション誘発型研究開発戦略マニュアル」を作成しました。

## 児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用

### 研究課題名

児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用

### プロジェクト期間

2021（R3）年 4 月～2023（R5）年 3 月

### プロジェクトメンバー

- ・川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）\*研究代表者
- ・高見 茂（京都光華女子大学 学長）
- ・吉田 都美（京都大学大学院医学研究科 特定講師）
- ・祐野 恵（京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット 特定助教）

### 行政担当部署

文部科学省 初等中等教育局健康教育・食育課

### 取り組む課題

GIGA スクール構想の中で今後集積していく各種の校務情報や、政府方針である PHR 構想の一環として集積される学校健診情報の活用は今後の課題です。しかし、わが国では、学校健診情報及び教育データを結び付けた体系的な分析は行われておらず、これらのデータの集積が教育政策における EBPM を進めるために有効であると示す知見やデータ収集の手順における論点についての検討はなされていません。適切に個人情報を管理し、関係者の理解を得て PHR を推進し情報を扱うことは政策課題であり、その解決を目指すことが必要とされています。

## プロジェクト概要

学校健康診断情報を元に、COVID-19 の発生による生活様式の変化が学童に与える影響を明らかにし、自治体・教育委員会が保有するデータを用いることで、新たな感染症が発生した際にも有効性の高い政策形成が可能となることを目指します。具体的には、以下の2点を行います。

①新型コロナウイルスの発生による生活様式の変化が学童に与える影響について、学校健康診断情報を用いて明らかにします。

②センシティブデータを利活用する際の自治体における個人情報保護に関する取り組みを調査し、課題の整理を行います。

## 2022 年度の主たる研究成果

令和4年度において得られた研究成果を前年度の分析結果とまとめ、共進化プロジェクトとして次の結論が得られました。

### ①新型コロナウイルスの発生による生活様式の変化が学童に与える影響

COVID-19 の活動制限が児童生徒の健康に与えた影響について検討しました。具体的には、2017年から2021年度の体格情報が取得できた44自治体の中学3年生119,963人を分析し、市町村別人口密度を用いて、居住地特性との関連を検討しました。結果として、COVID-19流行により学童の肥満が増加したことが示され、特に男子において影響が大きかったことがわかりました。地域的な分析からは、県別緊急事態宣言の発出とは有意な関連がみられなかったものの、人口密度の高い地域（都市部）において2020年の肥満割合の増加が顕著でした。

### ②データを利活用するうえでの自治体における個人情報保護条例に関する課題の整理

学校健康診断情報の利活用について基礎自治体と外部機関の連携を妨げる要因に関して検討しました。具体的には、学校健康診断情報の可視化を検討した自治体のうち検討過程が明らかな74自治体における、個人情報保護条例への対応を分析するとともに、全国207自治体の個人情報保護条例の規程を調査・分析しました。その結果、自治体の財政力や規模によって個人情報保護条例への対応に違いが確認されたものの、条例の規定については、「研究目的例外使用規定」及び「包括的な例外使用規定」の有無による影響は示されませんでした。

## 6. 関西ネットワークの発展

---

## 6. 関西ネットワークの発展

本拠点 STiPS は、関西ネットワークの拡大を目的とした研究会やイベントを開催しています。2022年度は、科学技術コミュニケーション分野の第一線で活躍する専門家を招いての研究会（シリーズの趣旨は後述）を開催し、新しいネットワークの開拓にも努めました。

### STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

本シリーズは、将来的に専門知と社会をつなぐ仕事に関心のある学生を念頭に置き、実務経験者によるゲストレクチャーを含む、参加者同士のディスカッションを中心に進行します。具体的には、科学技術コミュニケーションとよばれる分野の第一線で活躍するゲスト講師（実践的研究者、デザイナー、ファシリテーター、ジャーナリスト、政策担当者、弁護士、弁理士、シンクタンク研究者等）を招き、それぞれがどのようにキャリアを形成してきたのか、特に専門知と社会をつなぐためにどのような仕事をしているのかについてお話を伺いながら、参加者も交えて議論をしました。

## 第 96 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏） #1
- ゲスト：白瀧 浩志（パナソニックホールディングス株式会社（内閣府出向））
- 日時：2022 年 6 月 21 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSI センター）
- 協力：大阪大学フェロシップ創設事業「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェロシップ

2022 年 6 月 21 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）」がスタートしました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 21 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 1 回のゲストは、現在内閣府に出向しているパナソニックホールディングス株式会社の白瀧浩志さんです。前半は「研究しない、真面目な科学者」というテーマで、大学時代の研究やその後のキャリアについて、学生時代に得た経験や今後の展望などについてお話をうかがいました。後半は、前半での話題提供を踏まえ、参加者との質疑応答が行われました。

## 第 97 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏） #2
- ゲスト：大内 詩野（愛媛県南予地方局健康福祉環境部）
- 日時：2022 年 6 月 28 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSI センター）
- 協力：大阪大学フェロシップ創設事業「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェロシップ

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）」第 2 回を、2022 年 6 月 28 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 24 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 2 回のゲストは、大内詩野さん。このシリーズの他の回と同様に、今回もゲストによる話題提供から始まりました。話題提供のタイトルは「健康寿命を延ばすには？ 行政×研究機関のアプローチ」です。大学からのキャリアパスについてお話しいただいたほか、STiPS で取り組んだ研究テーマや、行政（特に保健所）での仕事、研究者としての研究の二つの視点から話していただきました。お話しの後では質疑応答も行われました。

## 第 98 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏） #3
- ゲスト：山脇 竹生（株式会社資生堂 みらい開発研究所）
- 日時：2022 年 7 月 5 日（火） 15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSI センター）
- 協力：大阪大学フェロシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェロシップ

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）」第 3 回を、2022 年 7 月 5 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 26 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



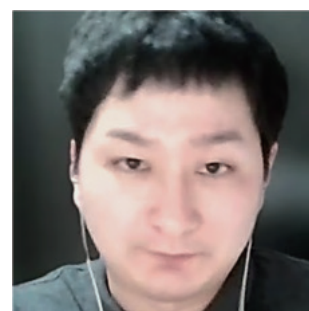
第 3 回のゲストは、超域イノベーション博士課程プログラムと大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の両方を終了して、現在資生堂に勤務している山脇竹生さんでした。「異分野での学びがどのように生きているか」というテーマでお話をうかがいました。事前にお送りしていた質問から「研究職以外の仕事を知りたい」という疑問と、「専門を活かしたい」という二点について答える形でお話してくださいました。お話し後は質疑応答も行われました。



## 第 99 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏） #4
- ゲスト：吉田 篤（株式会社三菱総合研究所 ヘルスケア&ウェルネス本部）
- 日時：2022 年 7 月 12 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSI センター）
- 協力：大阪大学フェロシップ創設事業 「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェロシップ

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）」第 4 回を、2022 年 7 月 12 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 23 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 4 回のゲストは株式会社三菱総合研究所の吉田篤さんでした。「シンクタンクとして関わる科学技術・イノベーション」というタイトルで話題提供いただきました。大学院での学びについて、また就職先としてシンクタンクを志望した理由、現在のお仕事の内容などについてお話をお聞きました。後半では学院での学びや専門性は異なる分野で働く際にどのように活かされるのかについてお話いただきました。

## 第 100 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏） #5
- ゲスト：祐野 恵（京都大学 学際融合教育研究推進センター）
- 日時：2022 年 7 月 19 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター（ELSI センター）
- 協力：大阪大学フェロシップ創設事業「社会と知の統合」を実現するイノベーション博士人材フェロシップ

2022 年 7 月 19 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2022 年度夏）」最終回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今シーズンも、Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催してきました。今回は、大阪大学の学生を中心に 22 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 5 回のゲストは、京都大学学際融合教育研究推進センターの祐野恵さんです。前半は、祐野さんから「政治の現場にあった課題と学術的な問いをつなぐ営み」というテーマで話題提供をしていただきました。地方政府の仕組みと、実務的関心と研究についてお話いただいた後に、質疑応答の時間を持ちました。



## 7. 国際連携の推進

---

## 7. 国際連携の推進

### 国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2022年度には、以下の活動を行うことができました。

#### I) PIT-UN（公益技術大学間ネットワーク）への参加

欧米諸国の大学が参加する Public Interest Technology University Network (PIT-UN: 公益技術大学間ネットワーク)へ STiPS として引き続き参加しました。

#### II) 教育・研究面での新たな連携の試み

米国ジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所・宇宙政策研究所と教育・研究協力として、日米両国の宇宙政策の歴史に関する共同研究を進めました。また、イスラエル工科大学から、Dr. Ayelet Baram-Tsabari をお招きし、科学技術コミュニケーション教育に関する研究会を実施しました。

### 海外調査及び発表等

2022年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

経済協力開発機構(OECD) バイオ・ナノ・コンバージングテクノロジー作業部会(BNCT WG)の“Technology Assessment and Foresight”プロジェクトに参画しており、2022年6月8、9日にオーストラリア科学アカデミーにて開催されたワークショップに参加しました。

## 8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

---

## 8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2022年度のSTiPS参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

### 大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子36ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

#### 著書、論文、寄稿等

- 小林傳司. 2022. 「ELSI および責任ある研究・イノベーション (RRI) について」, 『学術の動向』, 27 (7), 14-17, 2022年7月. 研究論文
- 小林傳司. 2022. 「社会と科学をつなぐ新しい「専門家」」, 村上陽一郎 編 『「専門家」とは誰か』, 晶文社, 199-229, 2022年10月. 著書
- 平川秀幸. 2023. 「リスクコミュニケーションとは」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 11-27, 2023年3月. 著書
- 平川秀幸. 2023. 「ポスト・ノーマルサイエンスとリスクコミュニケーション—科学知識の不定性からコミュニケーションを理解する」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 71-89, 2023年3月. 著書
- 平川秀幸. 2023. 「リスクコミュニケーションにおけるフレーミングの役割」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 90-112, 2023年3月. 著書
- 平川秀幸. 2023. 「リスクコミュニケーションと科学的助言」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 274-288, 2023年3月. 著書
- 平川秀幸, 奈良由美子. 2023. 「リスクガバナンスとリスクコミュニケーション—よりよい対話・共考・協働に向けて」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 289-302, 2023年3月. 著書
- 八木絵香, 工藤充, 水町衣里. 2022. 「第3章 成解を導く力を身につける: 学びの往還」, 堂目卓生, 山崎吾郎 編. 『やっかいな問題はみんなで解く』, 世界思想社, 68-91, 2022年12月. 著書
- 八木絵香. 2023. 「原子力とリスクコミュニケーション」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 171-191, 2023年3月. 著書
- 八木絵香. 2023. 「気候変動とリスクコミュニケーション」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 236-253, 2023年3月. 著書
- 鹿野祐介, 肥後楽, 小林茉莉子, 井上眞梨, 永山翔太, 長門裕介, 森下翔, 鈴木径一郎, 多湖真琴, 標葉隆馬, 岸本充生. 2022. 「ELSI および RRI をめぐる実践的研究: C to C マーケットプレイス事業者と ELSI 研究者の連携による知識生産」, 『研究 技術 計画』 37(3): 279-295, 2022年11月. 研究論文
- 鹿野祐介, 原健一. 2022. 「オンラインを含めた「対話の場における倫理」の確立に向けて ~哲学対話の理論と実践~」, 『ELSI NOTE』 23: 1-44, 2022年11月. 研究論文
- 鹿野祐介, 武田浩平, 肥後楽. 2023. 「「科学技術と社会」の将来を見据えた授業デザインと実践—シリアスゲーム教材の制作とトランスサイエンス—」, 『大阪大学高等教育研究』 11: 11-22, 2023年3月. 研究論文

- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) 私たちは皆、敗者である アニメ版「平家物語」で思い出したこと」, 『朝日新聞』, 4月29日朝刊, 2022年4月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) 軍事技術か否か…区別難しい時代に入 学問の自由とのバランスは」, 『朝日新聞』, 5月27日朝刊, 2022年5月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) ブラックボックスの「ご託宣」 アルゴリズムの透明性が欠かせない」, 『朝日新聞』, 6月24日朝刊, 2022年6月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) リスク課題 科学的な対応重ね、最後は「後悔残らない道」の選択を」, 『朝日新聞』, 7月29日朝刊, 2022年7月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) 政教分離から考える日本 「世間」は真の意味で人権を尊重しているか」, 『朝日新聞』, 8月26日朝刊, 2022年8月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) 「共同体」が極端にすり減った日本社会 「葬儀」は消えてしまうのか」, 『朝日新聞』, 9月23日朝刊, 2022年9月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) そもそもマイナンバーとは 目的は達成、その先急ぐ政府」, 『朝日新聞』, 10月28日朝刊, 2022年10月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) マイナンバーカードの取得を強く求める政府 本当の狙いはどこに」, 『朝日新聞』, 11月25日朝刊, 2022年11月. 寄稿
- **神里達博**. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) テレビ報道の変質 自己批判するドラマが問い直すのは、社会そのもの」, 『朝日新聞』, 12月23日朝刊, 2022年12月. 寄稿
- **神里達博**. 2023. 「(月刊安心新聞 plus) Web3.0の本質は「ある種の社会運動」 今は分岐点かもしれない」, 『朝日新聞』, 1月27日朝刊, 2023年1月. 寄稿
- **神里達博**. 2023. 「パンデミックが照らし出す「科学」と「政治」」, 『世界』, 966: 214-225, 2023年2月. 寄稿
- **神里達博**. 2023. 「(月刊安心新聞 plus) 前途多難な日本のロケット開発 宇宙産業の国際競争で生き残れるか」, 『朝日新聞』, 3月24日朝刊, 2023年3月. 寄稿
- **長門裕介, 朱喜哲, 岸本充生**. 2022. 「データビジネスにおける「ELSI」はどこから来て、どこへ行くのか」, 『研究 技術 計画』 37(3): 296-309, 2022年11月. 研究論文
- **岸本充生, 長門裕介**. 2022. 「量子技術の ELSI (倫理的・法的・社会的課題) に関する文献紹介: 2021~2022年を中心に」, 『ELSI NOTE』 24: 1-21, 2022年12月. 研究論文
- **岸本充生**. 2023. 「生体認証技術の ELSI に関するグローバル動向: 2020年4月~2022年11月」, 『ELSI NOTE』 25: 1-74, 2023年1月. 研究論文
- **岸本充生**. 2023. 「エマージングテクノロジーの社会実装としてみた「脱炭素技術の社会実装」」, 国立国会図書館, 調査及び立法考査局『2050年カーボンニュートラルの実現に向けた脱炭素技術の課題と展望 (令和4年度 科学技術に関する調査プロジェクト)』, 91-97, 2023年2月. 調査報告
- **岸本充生**. 2023. 「パネルディスカッション」, 国立国会図書館, 調査及び立法考査局『2050年カーボンニュートラルの実現に向けた脱炭素技術の課題と展望 (令和4年度 科学技術に関する調査プロジェクト)』, 99-111, 2023年2月. 調査報告
- **岸本充生**. 2023. 「脱炭素技術の社会実装のための論点 一問題提起への補論一」, 国立国会図書館, 調査及び立法考査局『2050年カーボンニュートラルの実現に向けた脱炭素技術の課題と展望 (令和4年度 科学技術に関する調査プロジェクト)』, 113-116, 2023年2月. 調査報告
- **岸本充生**. 2023. 「化学物質のリスクコミュニケーション」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送



大学教材)』, 放送大学教育振興会, 131-151, 2023 年 3 月. 著書

- **岸本充生**. 2023. 「新規技術とリスクコミュニケーション: ナノテクノロジーを例に」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 152-170, 2023 年 3 月. 著書
- **岸本充生**. 2023. 「デジタル化に伴う ELSI とリスクコミュニケーション」, 奈良由美子 編. 『リスクコミュニケーションの探究 (放送大学教材)』, 放送大学教育振興会, 254-273, 2023 年 3 月. 著書
- **岸本充生**. 2023. 「第 2 章 科学と政策の間や技術と社会の間のギャップの可視化と橋渡し」, 国立国会図書館, 調査及び立法考査局『科学技術のリスクコミュニケーション—新たな課題と展開— (令和 4 年度 科学技術に関する調査プロジェクト)』, 6-10, 2023 年 3 月. 調査報告
- **岸本充生**. 2023. 「第 1 章 宇宙空間利用の倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」, 国立国会図書館, 調査及び立法考査局『宇宙空間の利用をめぐる動向と課題 (令和 4 年度 科学技術に関する調査プロジェクト)』 7-22, 2023 年 3 月. 調査報告

## 学会発表等

- **小林傳司**. 2023. 「「総合知」が求められる時代: 疫学への期待」, 第 33 回日本疫学会学術総会「総合知による健康・幸福の向上」, (浜松市、アクトシティ浜松), 2023 年 2 月 2 日. 招待講演
- HARTWIG Manuela Gertrud, 江守正多, 三上直之, **八木絵香**. 2022. 「脱炭素社会の価値観の交渉: エネルギー技術影響評価枠組の構築における倫理的、法的、社会的価値観の統合の課題」, 2022 年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会 (東京、東京工業大学), 2022 年 11 月 27 日. 口頭発表
- 山田陽太, **神里達博**. 2022. 「現代日本における原子力開発体制の検討-2012 年以降を中心に」, 2022 年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会 (東京、東京工業大学), 2022 年 11 月 27 日. 口頭発表
- **水町衣里**. 2022. 「理科等の学習データを活用する EdTech の倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」日本科学教育学会第 46 回年会 (オンライン), 2022 年 9 月 17 日. 指定討論者
- 加納圭, 神崎宣次, **岸本充生**, 後藤崇志, 佐藤仁, 塩瀬隆之, 高橋哲, 藤村祐子, 堀口悟郎, **水町衣里**, 村上正行. 2022. 「学習データ活用 EdTech (エドテック) の ELSI 論点」日本科学教育学会第 46 回年会 (オンライン), 2022 年 9 月 17 日. パネリスト

## 社会活動 (講演会・展示会などアウトリーチ活動等)

- **小林傳司**. 2022. 講演「(RRI)の視点が研究プロジェクトや研究者に求められている理由」, RA 協議会第 8 回年次大会「リサーチ・アドミニストレーション機能の拡充による研究力強化への取り組み」(仙台市, 東北大学), 2022 年 8 月 30 日.
- **小林傳司**. 2022. 基調講演「総合知が求められる時代」, 東海国立大学機構カーボンニュートラル推進室 脱炭素社会の創造に向けた記念シンポジウム「脱炭素社会の創造に向けた大学の役割」(名古屋市, 名古屋大学), 2022 年 9 月 6 日.
- **小林傳司**. 2022. 基調講演「科学技術と Social Relevance」, 東京大学研究倫理推進室 令和 4 年度研究倫理セミナー「責任ある研究とイノベーションを考える」(オンライン) 2022 年 10 月 3 日.
- **小林傳司**. 2022. 講演「科学技術とジェンダー問題」, 国立女性会館 NWEC グローバルセミナー「デジタル技術はジェンダー平等を推進するか?」(オンライン) 2022 年 10 月 21 日.
- **小林傳司**. 2022. 講演「総合知が求められる時代と人材育成」, 文部科学省「SciREX ブラウンバッグセミナー」(オンライン), 2022 年 12 月 12 日.
- **小林傳司**. 2022. 講演「今日の人文・社会科学の課題」, 日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業シンポジウム (オンライン), 2022 年 12 月 15 日.

- 小林傳司. 2023. 講演「科学技術・イノベーションと社会、ガバナンス① ELSI/RRI を考える意義」, 科学技術・イノベーション政策研修 (オンライン), 2023 年 1 月 10 日.
- 小林傳司. 2023. 基調講演「総合知を科学技術・イノベーション創出の視点で考える」, 産学協働イノベーション人材育成シンポジウム 2022, (京都市、京都大学), 2023 年 1 月 19 日.
- 小林傳司. 2023. コメント掲載「対立する学術会議と政府、打開の道は探れるかー科学記者の目 (編集委員 滝順一)」, 『日本経済新聞』, 2023 年 1 月 25 日電子版, 2023 年 1 月 25 日.
- 小林傳司. 2023. コメント掲載「論壇 「科学による政策決定」は隠れ蓑?」, 『朝日新聞』, 2023 年 2 月 17 日電子版, 2023 年 2 月 17 日.
- 小林傳司. 2023. パネリスト, local knowledge オンラインイベント「専門家とは誰か〜専門家と専門性の実態を問う」 (オンライン), 2023 年 2 月 19 日.
- 小林傳司. 2023. 基調講演「ELSI の取組を求めるファンディングエージェンシーから、URA に期待される役割と展望について」, 第 8 回人文・社会科学系研究推進フォーラム「ELSI (倫理的・法的・社会的課題) に取り組む URA の在り方」 (東広島市、広島大学), 2023 年 3 月 16 日.
- 平川秀幸. 2023. コメント掲載「特報 核のごみ最終処分 国の責任でできるか 基本方針案 候補地選定へ「ギア上げる」 独断専行の懸念消えず」, 『中日新聞』, 2023 年 2 月 17 日朝刊, 2023 年 2 月 17 日.
- 八木絵香. 2023. 講演「社会的課題と専門領域をつなぐ教育一副専攻としての科学技術社会論一」, 千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」シンポジウム (オンライン), 2023 年 2 月 16 日.
- 八木絵香. 2023. パネリスト「社会的課題と専門領域をつなぐ教育一副専攻としての科学技術社会論一」, 千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」シンポジウム (オンライン), 2023 年 2 月 16 日.
- 渡邊浩崇. 2022. コメント掲載「米の周回基地 日本人 1 人搭乗 月探査計画 独自技術で貢献 居住棟の環境機器提供へ ISS 6 年延長に同意」, 『読売新聞』, 2022 年 12 月 1 日.
- 渡邊浩崇. 2022. コメント, news zero プライチ「#150 日本初 民間企業が宇宙ステーション建設へ」, 2022 年 12 月 12 日.
- 渡邊浩崇. 2022. 講演「ビッグサイエンスとしての日本の宇宙政策」, 研究・イノベーション学会九州・中国支部 第 29 回研究会 (九州大学大学院 STI 政策人材育成プログラム・コア科目「科学技術社会論概説」, 九州大学伊都キャンパス (対面) と Zoom のハイブリット), 2022 年 12 月 17 日.
- 渡邊浩崇. 2023. コメント掲載「新型ロケット「H3」初号機の発射中止、3 月 10 日までに再打ち上げへ」, 『ロイター通信』, 2023 年 2 月 17 日電子版, 2023 年 2 月 17 日.
- 渡邊浩崇. 2023. コメント掲載「新型ロケット「H3」打ち上げ失敗、日本の宇宙政策に打撃」, 『ロイター通信』, 2023 年 3 月 7 日電子版, 2023 年 3 月 7 日.
- Watanabe H. 2023. Comment, “Japan’s new rocket fails after engine issue, in blow to space ambitions,” *Reuters*, 7 March 2023, 2023 年 3 月 7 日.
- 渡邊浩崇. 2023. コメント掲載「日本の「H3」ロケット、打ち上げ失敗 指令破壊」, 『BBC NEWS JAPAN』, 2023 年 3 月 7 日電子版, 2023 年 3 月 7 日.
- Watanabe H. 2023. Comment, “Japan forced to destroy flagship H3 rocket in failed launch,” *BBC NEWS*, 7 March 2023, 2023 年 3 月 7 日.
- Watanabe H. 2023. Comment, “Japan’s space ambitions fizzle after rocket failure,” *Financial Times*, 11 March 2023, 2023 年 3 月 11 日.
- 神里達博. 2023. モデレーター「社会的課題と専門領域をつなぐ教育一副専攻としての科学技術社会論一」, 千葉大学「インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開」シンポジウム (オンライン), 2023 年 2 月 16 日.

- **神里達博**. 2023. パネリスト, local knowledge オンラインイベント「専門家とは誰か～専門家と専門性の実態を問う」(オンライン), 2023年2月19日.
- **神里達博**. 2023. パネリスト, 日立財団「倉田奨励金」人文・社会科学研究シンポジウム「科学技術社会における人文・社会科学的アプローチの重要性」(オンライン), 2023年3月18日.
- **朱喜哲, 岸本充生, 長門裕介**. 2022. 説明者, 電通プレスセミナー「データビジネスにおける ELSI (倫理的・法的・社会的課題) の現状」(オンライン), 2022年6月23日.
- **岸本充生**. 2022. 話題提供「データ利活用をめぐる近年の動向」, 第1回 大阪大学×2025年大阪・関西万博 データ利活用ワークショップ「2025年大阪・関西万博でのデータ利活用の原則やルールをいっしょに考えてみませんか?」(豊中市、大阪大学), 2022年7月13日.
- **小林正啓, 岸本充生**. 2022. ディスカッション「顔認証・生体認証技術をめぐる法規制と社会的変容」, ELSI センター研究会「顔認証・生体認証技術をめぐる法規制と社会的変容」(オンライン), 2022年7月25日.
- **高橋三徳, 多湖真琴, 藤本翔一, 岸本充生**. 2022. ディスカッション掲載「人文科学はイノベーションを起こせるか」, 『ELSI VOICE NO.3』, 12-21, 2022年7月.
- **岸本充生, 長門裕介**. 2022. ゲスト「【ELSI×モビリティ・過去編】新しい乗り物は社会にどう受け入れられる? 自転車が登場した時にタイムスリップ!」(メルカリ R4D が運営する YouTube チャンネル), 2022年8月3日(公開).
- **岸本充生, 長門裕介, 朱喜哲**. 2022. 対談記事掲載「生活者・データビジネス従事者の ELSI 課題意識を読み解く」, ウェブ電通報, 2022年8月22日.
- **岸本充生, 長門裕介**. 2022. ゲスト「【ELSI×モビリティ・現在未来編】バック・トゥ・ザ・フューチャー2のように、社会がホバーボードを受け入れるためには? 未来にタイムスリップ!」(メルカリ R4D が運営する YouTube チャンネル), 2022年8月25日(公開).
- **岸本充生, 井出和希**. 2022. 講師「コロナ禍における研究情報の発信を振り返るー「プレスリリース」の目利きになろうー」, SpringX 超学校「正しく学ぶ! 感染症から「いのち」と「くらし」を守る講座 season2」(オンライン), 2022年10月28日.
- **岸本充生**. 2022. 話題提供「新時代法務と「ELSI」」, Legal Force Conference2022「コロナで見えた、新しい法務のかたち」(東京、虎ノ門ヒルズ/オンライン), 2022年11月8日.
- **岸本充生**. 2022. 話題提供「リスク評価なくして、イノベーションなし」, 第35回日本リスク学会年次大会公開セミナー「多様化する社会へのリスク学の貢献」(オンライン), 2022年11月12日.
- **水町衣里**. 2023. 話題提供「科学のつながりを考える」, 神戸女学院 オンラインセミナー (オンライン), 2023年2月20日.
- **水町衣里**. 2023. 講演「大阪大学の取り組み」, CoSTEP 修了記念シンポジウム「ひらいて、むすんで～サイエンスコミュニケーションはなぜ必要なのか～」(札幌市、北海道大学), 2023年3月4日.
- **水町衣里**. 2023. パネリスト「サイエンスコミュニケーション、ひらいて、むすんで」, CoSTEP 修了記念シンポジウム「ひらいて、むすんで～サイエンスコミュニケーションはなぜ必要なのか～」(札幌市、北海道大学), 2023年3月4日.
- **水町衣里**. 2023. 講演「ELSI に関する研究や実践に伴走する: 大阪大学 ELSI センターでの事例」, 第8回人文・社会科学系研究推進フォーラム「ELSI (倫理的・法的・社会的課題) に取り組む URA の在り方」(東広島市、広島大学), 2023年3月16日.

## 京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

### 著書、論文、寄稿等

- Kazuma Shinno, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2022. “Association between baloxavir marboxil prescription for children with influenza B infections and short-term healthcare consumption in Japan during the 2018-19 influenza season”. *Journal of the Pediatric Infectious Diseases*, in press. 2022年4月. 論文.
- Jingwei Gao, Tomotsugu Seki, Kiyohide Usami, Di Fan, Akio Ikeda, and **Koji Kawakami**. 2022. “Complications associated with the use of enzyme-inducing and non-enzyme-inducing anti-seizure medications in the Japanese population: A retrospective cohort study”. *Epilepsy & Behavior*, 129: 108610. 2022年4月. 論文.
- Tomotsugu Seki, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2022. “Comparison of noninvasive follow-up testing in patients after percutaneous coronary intervention with drug-eluting stent implantation”. *Journal of Cardiology*, in press. 2022年5月. 論文.
- Tatsuya Tsuji, Izumi Sato, Yuji Kamimura, Haruko Ota, Chikashi Takeda, Kazuya Sobue, and **Koji Kawakami**. 2022. “Trends and patterns in the practice of pediatric sedation during magnetic resonance imaging in Japan: A longitudinal descriptive study from 2012 to 2019”. *Pediatric Anesthesia*, 32: 673-684. 2022年5月. 論文.
- 藤田悠介, 錦織達人, 下池典広, 村上克宏, 門川佳央, 伊丹淳, 近藤正人, 金谷誠一郎, 川田洋憲, 畑啓昭, 山本道宏, 金城洋介, 田中英治, 間中大, 佐藤誠二, 岡部寛, 山下好人, 姜貴嗣, 後藤禎人, **中山健夫**, **川上浩司**, 田中司朗, 久森重夫, 角田茂, 肥田侯矢, 小濱和貴. 2022. 「多機関共同後ろ向き研究における研究デザインと人材育成：京都食道胃手術勉強会での取り組み」, *日本外科学会雑誌*, 123 (3): 286-293. 2022年5月. 総説.
- Masato Takeuchi, Nobuya Inagaki, Masahito Ogura, and **Koji Kawakami**. 2022. “Initiating SGLT2 inhibitor therapy to improve renal outcomes for diabetic persons eligible for an intensified glucose-lowering regimen: hypothetical intervention using parametric g-formula modeling”. *BMJ Open Diabetes Research & Care*, in press. 2022年6月. 論文.
- Ryo Ishida, Tomotsugu Seki, and **Koji Kawakami**. 2022. “Association between anti-ulcer agent and *Clostridioides difficile* infection in patients receiving antibiotics: A retrospective cohort study using the Diagnosis Procedure Combination Database in Japan”. *Anaerobe*, 75:102537. 2022年6月. 論文.
- Ai Kido, Masahiro Miyake, Hiroshi Tamura, Shusuke Hiragi, Takeshi Kimura, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Shosuke Ohtera, Ayako Takahashi, Sotaro Ooto, **Koji Kawakami**, Tomohiro Kuroda, and Akitaka Tsujikawa. 2022. “Incidence and real-world clinical practice of exudative age-related macular degeneration: A nationwide population-based cohort study”. *Ophthalmology Science*, in press. 2022年6月. 論文.
- Koji Endo, Kayoko Mizuno, Tomotsugu Seki, Woo Jin Joo, Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2022. “Intensive care unit versus high-dependency care unit admission on mortality in patients with septic shock: A retrospective cohort study using Japanese claims data”. *Journal of Intensive Care*, in press. 2022年7月. 論文.
- Ruriko Koto, Izumi Sato, Masanari Kuwabara, Tomotsugu Seki, and **Koji Kawakami**. 2022. “Temporal trends in the prevalence and characteristics of hypouricaemia: A descriptive study of medical check-up and administrative claims data”. *Clinical Rheumatology*, 41(7):2113-2119. 2022年7月. 論文.
- Tetsuji Yoneyama, Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2022. “Comparison of laparoscopic and open inguinal hernia repair in adults: A retrospective cohort study using a medical claims database”. *Asian Journal of Endoscopic Surgery*, 15: 513-523. 2022年7月. 論文.
- **川上浩司**. 2022. 「リアルワールドデータと薬剤疫学 (監訳：川上浩司, 漆原尚巳, 佐藤泉美)」, 大修館書店, 2022年7月. 著書.

- 深澤俊貴, 田中佐智子, **川上 浩司**. 2022. 「医療データベースを用いた観察研究の可能性」, *ファルマシア*, 58(8): 777-781. 2022年8月. 総説.
- Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, Yo Kishimoto, Koichi Omori, and **Koji Kawakami**. 2022. “Risk factors for recurrence of peritonsillar abscess”. *Laryngoscope*, in press. 2022年8月. 論文.
- Isao Nahara, Masato Takeuchi, Hiroshi Yonekura, Chikashi Takeda, and **Koji Kawakami**. 2022. “Safety of sugammadex for myasthenia gravis patients undergoing general anaesthesia: a retrospective database analysis”. *BJA Open*, in press. 2022年9月. 論文.
- Masahiro Noda, Satomi Yoshida, Chihiro Kawakami, Masato Takeuchi, **Koji Kawakami**, Shuichi Ito; Japan Environment and Children's Study Group. 2022. “Association of pre-pregnancy physical activity with obesity in offspring: The Japan Environment and Children's Study (JECS)”. *Obesity*, 30(9):1851-1862. 2022年9月. 論文.
- Hiroshi Kimura, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2022. “Impact of potentially inappropriate medication on kidney function in chronic kidney disease: Retrospective cohort study”. *Nephron*, in press. 2022年9月. 論文.
- Toshiki Fukasawa, Tomotsugu Seki, Masayuki Nakashima, and **Koji Kawakami**. 2022. “Comparative effectiveness and safety of edoxaban, rivaroxaban, and apixaban in patients with venous thromboembolism: A cohort study”. *Journal of Thrombosis and Haemostasis*, 20 (9): 2083-2097. 2022年9月. 論文.
- 深澤俊貴, 田中佐智子, **川上浩司**. 2022. 「レセプトデータベース」, *腎と透析*, 93(3): 404-408. 2022年9月. 総説.
- Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Sachiko Tanaka-Mizuno, Kayoko Mizuno, Masayuki Nakashima, Toshiki Fukasawa, and **Koji Kawakami**. 2022. “Clinical epidemiology and pharmacoepidemiology studies with real-world databases”. *Proceeding of Japanese Academy of Science, Series B*, 98: 517-528. 2022年10月. 総説.
- 水野佳世子, **川上浩司**. 2022. 「リアルワールドデータを活用した臨床研究について (解説)」, *耳鼻咽喉科*, 2(5): 681-686. 2022年11月. 総説.
- Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, Yuji Kanazawa, Yo Kishimoto, Atsushi Suehiro, Ken Iwanaga, **Koji Kawakami**, and Koichi Omori. 2022. “Outcomes of aspiration prevention surgery: a retrospective cohort study using a Japanese claims database”. *Dysphagia*, 37(6):1532-1541. 2022年12月. 論文.
- Yuji Kunitomi, Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2023. “Efficacy of Daikenchuto in the prevention of bowel obstruction in patients with colorectal cancer undergoing laparoscopic surgery: An observational study using a Japanese administrative claims database.” *Supportive Care in Cancer*, 31:133. 2023年1月. 論文.
- Kairi Ri, Toshiki Fukasawa, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2023. “Risk of parkinsonism and related movement disorders with gabapentinoids or tramadol: A case-crossover study”. *Pharmacotherapy*, 43(2):136-144. 2023年1月. 論文.
- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Masato Takeuchi, Shunsuke Fujibayashi, Bungo Otsuki, Koichi Murata, Takayoshi Shimizu, Shuichi Matsuda, and **Koji Kawakami**. 2023. “Reoperation rates of microendoscopic discectomy compared with conventional open lumbar discectomy: A large database study”. *Clinical Orthopaedics and Related Research*, 481(1):145-154. 2023年1月. 論文.
- 竹内正人, **川上浩司**. 2023. 「電子カルテ由来診療情報データベース (康永秀生監修:リアルワールドデータを用いた臨床研究の進化)」, *医学のあゆみ*, 284(8): 576-579. 2023年2月. 総説.
- Koji Endo, Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2023. “Impact of the COVID-19 pandemic on the incidence of healthcare facility-onset *Clostridioides difficile* infection in hospitalized patients with sepsis: Interrupted time series analysis using Japanese Diagnosis Procedure Combination data”. *Anaerobe*, 79: 102693. 2023年2月. 論文.
- Akiko Okuda, Yoshihide Inayama, Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, **Koji Kawakami**, Masaki Mandai, and Toshihiro

- Higuchi. 2023. “Long-term versus short-term tocolysis with ritodrine hydrochloride: Propensity score-matched analysis”. *European Journal of Obstetrics & Gynecology and Reproductive Biology*, 282: 77-82. 2023年3月. 論文.
- Ruriko Koto, Izumi Sato, Masanari Kuwabara, Tomotsugu Seki, and **Koji Kawakami**. 2023. “The association between hypouricemia and cardiometabolic diseases: Analysing nationwide data from medical check-up and health insurance records”. *Journal of Clinical Rheumatology*, 29(2):59-67. 2023年3月. 論文.
  - Masato Takeuchi, Shoichiro Inokuchi, Takeshi Kimura, Narumi Eguchi, Tai Takahashi, **Koji Kawakami**, and Tai Takahashi. 2023. Descriptive epidemiology of COVID-19 in Japan 2020: Insights from a multihospital database. *Annals of Clinical Epidemiology*, 5(1): 5-12. 2023年3月. 論文.
  - Tomotsugu Seki, Morio Aki, Toshi A. Furukawa, Hirotsugu Kawashima, Tomotaka Miki, Yujin Sawaki, Takaaki Ando, Kentaro Katsuragi, Takahiro Kawashima, Senkei Ueno, Takashi Miyagi, Shunichi Noma, Shiro Tanaka, **Koji Kawakami**, for KONOTORI investigators. 2023. Electronic health record nested reminders for serum lithium level monitoring in patients with mood disorder: randomized controlled trial. *Journal of Medical Internet Research*, 25: e40595. 2023年3月. 論文.
  - Siming Chen, Toshiki Fukasawa, Akio Ikeda, Masato Takeuchi, Akihiro Shimotake, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2023. “Adherence to and persistence with lacosamide, perampanel, lamotrigine, and levetiracetam in adult patients with focal epilepsy in Japan: A descriptive cohort study using a claims database”. *Heliyon*, 9: e15017. 2023年3月. 論文.
  - Tetsuji Yoneyama, Izumi Sato, Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2023. “Recent trend of using computed tomography to diagnose pediatric appendicitis at the first hospital visit: A descriptive study using a medical claims database”. *Pediatric Emergency Care*, 39(4): 236-241. 2023年3月. 論文.
  - Masato Takeuchi, Kanna Shinkawa, Motoko Yanagita, and **Koji Kawakami**. 2023. “Hypothetical intervention of targeted systolic blood pressure control of <120 mm Hg on renal prognosis for persons with stage 3–4 chronic kidney disease: An application of parametric g-formula using health checkup data in Japan”. *Clinical and Experimental Nephrology*, 27(6):542-547. 2023年3月. 論文.
  - Yoshihide Inayama, Kayoko Mizuno, Ken Yamaguchi, Junzo Hamanishi, Masato Takeuchi, Miho Egawa, Masaki Mandai, and **Koji Kawakami**. 2023. “Real-world practice of estrogen replacement therapy after surgery for endometrial cancer: A descriptive study using a Japanese claim database”. *International Journal of Clinical Oncology*, 28:445-453. 2023年3月. 論文.
  - Akira Sato, Toshitaka Morishima, Masato Takeuchi, Kayo Nakata, **Koji Kawakami**, and Isao Miyashiro. 2023. “Survival in non-small cell lung cancer patients with versus without prior cancer”. *Scientific Reports*, 13: 4269. 2023年3月. 論文.
  - Kenshi Sawa, Izumi Sato, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2023. “Risk of pneumonitis in non-small cell lung cancer patients with preexisting interstitial lung diseases treated with immune checkpoint inhibitors: A nationwide retrospective cohort study”. *Cancer Immunology, Immunotherapy*, 72:591-598. 2023年3月. 論文.
  - カール・ベッカー. 2022. 「日本人の死生観と宗教の役割」, *Osaka Center Report 2022 May* (金光教大阪センター), 46-87. 2022年5月. 講演記録.
  - カール・ベッカー, 島菌進. 2022. 「生命倫理から考える『命』」, 『比較文明』, 37, 107-109. 2022年7月. 講演記録.
  - カール・ベッカー, 滝野隆浩. 2022. 「『死別悲嘆』を支えるのは」, *毎日新聞*, 2022年8月14日朝刊. 2022年8月. 寄稿.
  - **Becker, CB**, Taniyama, Y, Sasaki, N, Kondo-Arita, M, Yamada, S, & Yamamoto, K. 2022. “Evaluations of Funerals and Health Trajectories in the Second Year After Bereavement: The Ongoing Japan National Survey”. *OMEGA - Journal of Death and Dying*, Online ahead of print. 2022年9月. 論文.

- **Becker CB**, Taniyama Y, Sasaki N, Kondo-Arita M, Yamada S, Yamamoto K. 2022. “How Funerals Mediate the Psychosocial Impact of Grief: Qualitative Analysis of Open-ended Responses to a National Survey in Japan”. *Social Science and Medicine—Mental Health*, 2. 2022 年 12 月. 論文.
- **Becker, CB**, Taniyama, Y, Sasaki, N, Kondo-Arita, M, Yamada, S, & Yamamoto, K. 2022. “Ten Years After—A Follow-up Survey on Continuing Daily Symptoms of Grief and Medical Costs in Japan”, *Journal of Affective Disorders Reports*, 10, 100443. 2022 年 12 月. 論文.
- Kondo-Arita, M, & **Becker, CB**. 2023. “Changing Funerals and Their Effects on Bereavement Grief in Japan”. *OMEGA - Journal of Death and Dying*, Online ahead of print. 2023 年 2 月. 論文.
- 石井敦子, **カール・ベッカー**, 波江野茂彦, 伊藤景. 2023. 『家族の生活はどうなる？マンガで考える在宅医療の選択』, 健康と良い友だち社, 2023 年 3 月. 著書.
- Li, Xinyi, **Ito, Junichi**. 2023. “Determinants of technical efficiency and farmers’ crop choice rationality: A case study of rural Gansu, China”. *Journal of Asian Economics*, 84, 101558. 2023 年 2 月. 論文.
- **Naoyuki Iwashita**. 2022. “Why Fintech Is Not Changing Japanese Banking”. *Asian Economic Policy Review*, 17(2): 297-310. 2022 年 7 月. 論文.
- **岩下直行**. 2022. 「フィンテックは日本の金融を変えたか」, 『SBI Research Review』, 2: 5-13. SBI 金融経済研究所. 2022 年 8 月. 寄稿.
- Sengoku T, Ishizaki T, Goto Y, Iwao T, Ohtera S, Sakai M, Kato G, **Nakayama T**, Takahashi Y. 2022. “Prevalence of type 2 diabetes by age, sex and geographical area among two million public assistance recipients in Japan: a cross-sectional study using a nationally representative claims database”. *J Epidemiol Community Health*, 76(4):391-397, 2022 年 4 月. 論文.
- Araki K, Takahashi Y, Okada H, **Nakayama T**. 2022. “Social prescribing from the patient's perspective: A literature review”. *J Gen Fam Med*, 23(5):299-309, 2022 年 4 月. 論文.
- Sakai F, Hirata K, Igarashi H, Takeshima T, **Nakayama T**, Sano H, Kondo H, Shibasaki Y, Koga N. 2022. “A study to investigate the prevalence of headache disorders and migraine among people registered in a health insurance association in Japan”. *J Headache Pain*, 23(1):70, 2022 年 6 月. 論文.
- Fujimoto S, Ogawa T, Komukai K, **Nakayama T**. 2022. “Effect of education on physical and occupational therapists' perceptions of clinical practice guidelines and shared decision making: a randomized controlled trial”. *J Phys Ther Sci*, 34(6):445-453, 2022 年 6 月. 論文.
- Nishimura M, Denning KH, Sampson EL, de Oliveira Vidal EI, de Abreu WC, Kaasalainen S, Eisenmann Y, Dempsey L, Moore KJ, Davies N, Bolt SR, Meijers JMM, Dekker NL, Miyashita M, Nakanishi M, **Nakayama T**, van der Steen JT. 2022. “Cross-cultural conceptualization of a good end of life with dementia: a qualitative study”. *BMC Palliat Care*, 21(1):106, 2022 年 6 月. 論文.
- Inagaki N, Tsuchiya M, Otani K, **Nakayama T**. 2022. “Shared decision making between patients with Fabry disease and physicians in Japan: An online survey”. *Mol Genet Metab Rep*, 32:100899, 2022 年 8 月. 論文.
- Takashi N, McCarthy MJ, Ono-Kihara M, Kihara M, **Nakayama T**. 2022. “Disagreement about perceptions of patient disability between the stroke patient and caregiver: a cross sectional study exploring the association to patient and caregiver quality of life”. *Aging Ment Health*, 1-9, 2022 年 8 月. 論文.
- Ikeda-Sakai Y, Kubo K, Wada M, Seki R, Hijikata Y, Yoshioka T, Takahashi Y, **Nakayama T**. 2022. “Effectiveness and safety of a program for appropriate urinary catheter use in stroke care: A multicenter prospective study”. *J Eval Clin Pract*, 28(4):542-549, 2022 年 8 月. 論文.
- Takeuchi J, Yanagimoto Y, Sato Y, Ochiai R, Moriichi A, Ishizaki Y, **Nakayama T**. 2022. “Efficacious interventions for

improving the transition readiness of adolescents and young adult patients with chronic illness: A narrative review of randomized control trials assessed with the transition readiness assessment questionnaire”. *Front Pediatr*, 10:983367, 2022年9月. 論文.

- Shimamoto T, Tateyama Y, Kobayashi D, Yamamoto K, Takahashi Y, Ueshima H, Sasaki K, **Nakayama T**, Iwami T. 2022. “Temporal Trend in an Initial Treatment, Survival, and Medical Costs Among Patients With Lung Cancer Between 2013 and 2018 in Kyoto City, Japan”. *Value Health Reg Issues*. 31:163-168. 2022年9月. 論文.
- Kohno A, Dahlui M, Koh D, Dhamanti I, Rahman H, **Nakayama T**. 2022. “Factors influencing healthcare-seeking behaviour among Muslims from Southeast Asian countries (Indonesia and Malaysia) living in Japan: an exploratory qualitative study”. *BMJ Open*, 12(10):e058718, 2022年10月. 論文.
- Uchida T, Takahashi Y, Yamashita H, Nakaoku Y, Ohura T, Okura T, Masuzawa Y, Hosaka M, Kobayashi H, Sengoku T, **Nakayama T**. 2022. “Evaluation of Clinical Practice Guidelines for Rare Diseases in Japan”. *JMA J*. 17;5(4):460-470. 2022年10月. 論文.
- Iwagami H, Seta T, Nakano S, Wakita M, Konishi T, Matsumoto H, Nakatani Y, Akamatsu T, Urai S, Uenoyama Y, Yamashita Y, **Nakayama T**. 2022. “Association between antispasmodics and detection of lesions by screening esophagogastroduodenoscopy”. *JGH Open*, 6(11):792-798, 2022年10月. 論文.
- Takashi N, Musumari PM, Techasrivichien T, Suguimoto SP, Ono-Kihara M, Kihara M, **Nakayama T**. 2022. “Unmet needs in long-term outpatient rehabilitative care: a qualitative and multi-perspective study in Japan”. *Disabil Rehabil*, 1-9, 2022年10月. 論文.
- Okabayashi S, Kitazawa K, Kawamura T, **Nakayama T**. 2022. “E-Learning Material of Evidence-Based Medicine for Laypersons”. *Health Lit Res Pract*, 6(4):e290-e299, 2022年10月. 論文.
- Ishizaki M, Toyama M, Imura H, Takahashi Y, **Nakayama T**. 2022. “Tracheostomy decannulation rates in Japan: a retrospective cohort study using a claims database”. *Sci Rep*, 12(1):19801, 2022年11月. 論文.
- Dadras O, Dadras M, Jafari L, **Nakayama T**, Dadras F. 2022. “Women empowerment and access to maternity and reproductive healthcare in Pakistan: cross-validation of a Survey-based Index in Afghanistan (SWEI-A)”. *BMC Womens Health*, 22(1):453, 2022年11月. 論文.
- Amagasa T, **Nakayama T**. 2022. “Relationships Among Pay-for-Performance, Work Stressors, and Depression in Sales Workers: A Structural Equation Model Analysis”. *J Occup Environ Med*, 64(12):1018-1024, 2022年12月. 論文.
- Okamoto F, Nishikawa Y, Twalla Y, **Nakayama T**, Masai S. 2022. “Ebola outbreak in Uganda: patient values and preferences”. *Lancet*, 400(10367):1925-1926, 2022年12月. 論文.
- Tsuji N, Takahashi Y, Sakai M, Ohtera S, Kaneyama J, Cho K, Kato G, Ohtsuru S, **Nakayama T**. 2023. “Trend of anticoagulant therapy in elderly patients with atrial fibrillation considering risks of cerebral infarction and bleeding”. *Sci Rep*, 5:13(1):192, 2023年1月. 論文.
- 宮原哲, 中山健夫. 2023. 『治療効果アップにつながる患者のコミュニケーション力 医師との会話・失敗例と成功例をケースごとに解説』, 朝日新聞出版(東京), 2023年2月21日. 著書.
- Suzuki S, Nishikawa Y, Okada H, **Nakayama T**. 2023. “Information-seeking behaviour of community pharmacists during the COVID-19 pandemic: an ecological study”. *BMJ Open*, 15:13(2):e062465, 2023年2月. 論文.
- Nishimura M, Toyama M, Mori H, Sano M, Imura H, Kuriyama A, **Nakayama T**. 2023. “Providing End-of-Life Care for Patients Dying of COVID-19 and Their Families in Isolated Death During the Pandemic in Japan: The Providing End-of-life Care for COVID-19 Project”. *Chest*, 163(2):383-395, 2023年2月. 論文.
- 広井良典. 2022. 「21世紀の新たな社会像と統合医療」, 『統合医療学会誌』, 15(1):8-16, 2022年5月. 論文.
- 広井良典. 2022. 「ケアとしての科学——科学と社会の未来・序説」, 『ひらく』, 第7号, 209-217, 2022年6月. 論文.



- 広井良典. 2022. 「第 5 章 AI を活用した未来構想と地球倫理」、西垣通 編. 『AI・ロボットと共存の倫理』, 岩波書店, 2022 年 7 月 5 日. 著書.
- 広井良典. 2022. 「モラル・モチベーションと職員の幸福度」, 『ガバナンス』, 2022 年 8 月号, 29-31, 2022 年 8 月. 論文.
- 広井良典. 2022. 「幸福のための社会保障」, 『週刊社会保障』, 2022 年 9 月 12 日号, 42-47, 2022 年 9 月. 論文.
- 広井良典. 2022. 「人口減少社会を考える視点」, 『環境情報科学』, 51(3):10-15. 2022 年 9 月. 論文.
- 広井良典. 2023. 「第 14 章 ウォークアブルなまちをつくる——医療・福祉と都市・交通の統合に向けて」, 今中雄一 編. 『認知症にやさしい健康まちづくりハンドブック』, 学芸出版社, 2023 年 3 月 31 日. 著書.
- Kuriyama M, Hirose H, Masuda T, Shudou M, Arafiles JVV, Imanishi M, Maekawa M, Hara Y, **Futaki S**. 2022. “Piezo1 activation using Yoda1 inhibits macropinocytosis in A431 human epidermoid carcinoma cells”. *Sci Rep*, 12(1):6322, 2022 年 4 月. 論文.
- Shinga K, Iwata T, Murata K, Daitoku Y, Michibata J, Arafiles JVV, Sakamoto K, Akishiba M, Takatani-Nakase T, Mizuno S, Sugiyama F, Imanishi M, **Futaki S**. 2022. “L17ER4: A cell-permeable attenuated cationic amphiphilic lytic peptide”. *Bioorg Med Chem*, 61:116728, 2022 年 5 月. 論文.
- Kuriyama M, Hirose H, Masuda T, Shudou M, Arafiles JVV, Imanishi M, Maekawa M, Hara Y, **Futaki S**. 2022. “Publisher Correction: Piezo1 activation using Yoda1 inhibits macropinocytosis in A431 human epidermoid carcinoma cells”. *Sci Rep*, 12(1):7873, 2022 年 5 月. 論文.
- Nakagawa Y, Arafiles JVV, Kawaguchi Y, Nakase I, Hirose H, **Futaki S**. 2022. “Stearylated Macropinocytosis-Inducing Peptides Facilitating the Cellular Uptake of Small Extracellular Vesicles”. *Bioconjug Chem*, 33(5):869-880, 2022 年 5 月. 論文.
- Nomura K, Kawano K, Kawaguchi Y, Kawamura Y, Michibata J, Kuwata K, Sugiyama K, Kusumoto K, **Futaki S**. 2022. “Hemopexin as a Potential Binding Partner of Arginine-Rich Cell-Penetrating Peptides in Serum”. *ACS Pharmacol Transl Sci*, 5(8):603-615, 2022 年 7 月. 論文.
- Okano S, Kawaguchi Y, Kawano K, Hirose H, Imanishi M, **Futaki S**. 2022. “Split luciferase-based estimation of cytosolic cargo concentration delivered intracellularly via attenuated cationic amphiphilic lytic peptides”. *Bioorg Med Chem Lett*, 72:128875, 2022 年 9 月. 論文.
- Hirose H, Hirai Y, Sasaki M, Sawa H, **Futaki S**. 2022. “Quantitative Analysis of Extracellular Vesicle Uptake and Fusion with Recipient Cells”. *Bioconjug Chem*, 33(10):1852-1859, 2022 年 10 月. 論文.
- Hirose H, Maekawa M, Ida H, Kuriyama M, Takahashi Y, **Futaki S**. 2022. “A noncanonical endocytic pathway is involved in the internalization of 3  $\mu$  m polystyrene beads into HeLa cells”. *Biomater Sci*, 10(24):7093-7102, 2022 年 12 月. 論文.
- 呉羽真, 伊勢田哲治. 2022. 『宇宙開発をみんなで議論しよう』, 名古屋大学出版会, 2022 年 6 月. 共編著.
- 宮野公樹. 2022. 「解く理系に問う文系—超えるのではなく迎る、二つの文化—」, 『アステイオン』, 97 巻: 196-211, 2022 年 11 月. 寄稿 (共著).
- 宮野公樹. 2023. 「誰も教えてくれない「学びとは何か」、学び直しブームへの「大きな違和感」」, 『WEB 現代ビジネス』, 2023 年 3 月. 寄稿.

## 学会発表等

- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 竹内正人, 藤林俊介, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 松田秀一, 川上浩司. 2022. 「レセプトデータを用いた内視鏡下椎間板ヘルニア切除術と腰椎椎間板ヘルニア切除術の術後再手術率の比較」, 第 51 回日本脊椎病学会学術集会 (横浜), 2022 年 4 月 21-23 日, 口頭発表.

- 辻達也, 仙頭佳起, 中西俊之, 佐藤泉美, **川上浩司**, 川崎達也, 内藤貴基, 藤谷茂樹, 祖父江和哉, 「In-Hospital Emergency Study Group. 2022. Rapid Response System 要請後の新たな Do Not Attempt Resuscitation order に関連する要因: 10年間の多施設オンラインレジストリの解析」, 日本集中治療医学会第6回東海北陸支部学術集会(名古屋), 2022年6月11日. 口頭発表.
- 三宅健太郎, 吉田都美, 竹内正人, **川上浩司**. 2022. 「ハイリスク非心臓手術における術中ニコランジル投与の効果の検討: 過去起点コホート研究」, 日本麻酔科学会第69回学術集会(神戸), 2022年6月16-18日. 口頭発表.
- 吉田都美, 矢内貴憲, 竹内正人, **川上浩司**. 2022. 「COVID-19の活動制限が小児の肥満に与えた影響: 11万人の学校健診情報による検討」, 第81回日本公衆衛生学会総会(甲府), 2022年10月7日-9日. ポスター発表.
- Masato Takeuchi and **Koji Kawakami**. 2022. “Initiating GLP-1 RA therapy to improve renal outcomes for persons with uncontrolled diabetes: hypothetical intervention using parametric g-formula modeling”. 14th Asian Conference on Pharmacoepidemiology (ACPE 2022), 2022年10月21-23日. ポスター発表.
- Tatsuya Tsuji, Yoshiki Sento, Toshiyuki Nakanishi, Tetsuya Tamura, Eisuke Kako, Izumi Sato, **Koji Kawakami**, Tatsuya Kawasaki, Takaki Naito, Shigeki Fujitani, Kazuya Sobue, on behalf of In-Hospital Emergency Group. 2022. “Incidence and factors associated with newly implemented do-not-attempt-resuscitation orders among deteriorating patients after rapid response team activation: A retrospective observational study using a Japanese multicenter database from 2012 to 2021”. European society of intensive care medicine (ESICM) 35Th annual congress (Paris, France), 2022年10月22-26日. 口頭発表.
- 中畑みさき, 田中佐智子, **川上浩司**. 2022. 「2型糖尿病患者への栄養指導と大血管障害発生の関連 診療情報データベースを用いた過去起点コホート研究」, 第5回日本臨床疫学会学術集会(東京), 2022年11月12-13日. ポスター発表.
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 竹内正人, 藤林俊介, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 松田秀一, **川上浩司**. 2022. 腰椎側方椎体間固定術と腰椎後方椎体間固定術の術後創部感染発生率の比較. 第5回日本臨床疫学会学術集会(東京), 2022年11月12-13日. 口頭発表.
- 嶋崎翔, 深澤俊貴, 近藤誉之, 竹内正人, 大倉敬之, 高橋良輔, **川上浩司**. 2022. 「多発性硬化症患者におけるフマル酸ジメチルとフィンゴリモドの有効性、治療継続率、および服薬アドヒアランスの比較」, 第27回日本薬剤疫学会学術総会(神戸), 2022年11月17-19日. 口頭発表.
- 小泉志保, 井出和希, **Becker Carl**, 當山まゆみ, 西川佳孝, 岡田浩, 高橋由光, **中山健夫**. 2022. 「日本の医学雑誌の投稿規定における研究公正の記述 ICMJE Recommendations の記載項目を含めた評価」, ヘルスコミュニケーションウィークプログラム, 2022年9月30日-10月1日. 171頁. ポスター発表.
- **カール・ベッカー**. 2022. 「死別悲嘆に対するスピリチュアルケアと葬儀の効果」, 日本スピリチュアルケア学会, 兵庫県看護協会(元町), 2022年10月30日. 講演.
- **Becker Carl**. 2022. “Empowering Asian Families by Embracing the Challenge of Elders’ Death,” CIFA Conference Singapore (Online), 2022年11月8日. 講演.
- **Becker Carl**. 2022. “How Bereavement Affects Medical and Social Service Use,” UK National Health Service, Scotland Conference (Online), 2022年11月24日. 講演.
- **カール・ベッカー**. 2022. 「日本人の死生観を活かす」, 三重カレッジ(津市), 2022年11月25日. 講演.
- **Becker, Carl**. 2023. “Educating Medical Professionals, Social Workers, and Families to Improve Resilience from Severe Grief after Bereavement,” IICE/IAFOR Forum (Hawaii Convention Center, Honolulu), 2023年1月7日. 講演.
- **Becker, Carl**, Ishii, A, Haeno, S. 2023. “Using Manga to Educate Families and Nurses in Advanced Care Planning,” 26th East Asian Forum of Nursing Scholars: EAFONS (東京大学安田講堂), 2023年3月10日, ポスター発表.
- Li, Xinyi and **Ito, Junichi**. 2023. “Region differences and dynamic evolution of China’s agricultural technology”. Asian Society of Agricultural Economists (Tokyo). 2023年3月18日. 口頭発表.

- 中山健夫. 2022. 「特定健診・特定保健指導の行方」, 第 58 回日本循環器病予防学会学術集会 【シンポジウム 1】 今後の循環器疾患予防研究と対策の展望: これまでの流れとこれからの課題, 2022 年 6 月 11 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「Shared Decision Making: EBM の原点からその先」, 糖尿病・心理面からのアプローチ研究会, 2022 年 6 月 13 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「不確実性の中での意思決定: エビデンスから Shared Decision Making、コンセンサス形成へ」, 第 63 回日本歯科医療管理学会総会・学術大会, 2022 年 6 月 19 日. 特別講演.
- 中山健夫. 2022. 「EBM の原点からその先: Shared Decision Making とは何か?」, 第 67 回日本透析医学会学術集会・総会, 2022 年 6 月 25 日. 特別講演.
- 中山健夫. 2022. 「Shared Decision Making の概要」, 第 30 回 日本乳癌学会学術総会 共催セミナー・アラガン・ジャパン, 2022 年 6 月 30 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「Minds 診療ガイドライン 作成マニュアルのポイント」, 第 26 回那須ティーチイン, 2022 年 7 月 23 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「ヘルス・リテラシーの向上と SDM (共有意思決定) の実践に向けて」, 第 31 回 日本リウマチ学会近畿支部学術集会, 2022 年 9 月 3 日. 教育講演.
- 中山健夫. 2022. 「青森 MPH へのエール 青森県立保健大学大学院 MPH コース開設記念シンポジウム」, 2022 年 9 月 3 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「SDM とは何か? -EBM の原点からその先へ-」, ふじのくに 皮膚科 Expert Meeting, 2022 年 9 月 21 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「糖尿病診療におけるシェアード・ディシジョン・メイキング」, 第 36 回内分泌糖尿病心理行動研究会, 2022 年 10 月 2 日. 特別講演.
- 中山健夫. 2022. 「「診療ガイドライン」をつくり、つかう: 現在の考え方、課題、今後の展望」, 第 76 回日本臨床眼科学会 シンポジウム 1 エビデンスに基づく新しい診療ガイドライン, 2022 年 10 月 13 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 「臨床意思決定におけるエビデンス情報の活用スタンダード」, 第 20 回日本神経理学療法学会 学術大会, 2022 年 10 月 15 日. 特別講演.
- 中山健夫. 2022. 「データからわかること ~医療・介護データを読み解き価値創造~」, みんなの認知症情報学会 第 5 回年次大会, 2022 年 10 月 22 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. シンポジウム・保健医療介護ビッグデータ研究 人材育成の取り組み 京都大学における 医療データ利活用人材育成プログラム, 第 5 回 日本臨床疫学会年次学術大会, 2022 年 11 月 13 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. 企画シンポジウム「医療情報データベース研究のためのアウトカム定義レポジトリ」 RECORD-PE : 「日常的に観察されて集められる健康情報を用いて行われる薬剤疫学研究の報告に関する声明」の概要, 第 27 回日本薬剤疫学会学術総会, 2022 年 11 月 19 日. 講演.
- 中山健夫. 2022. シンポジウム「子どもの心・体と環境を考える会」としての歩みと次世代へのメッセージ ~歴代大会長から わたしたちが、子どもたちとできること: 日本子ども健康科学会での 22 年を振り返って, 第 23 回日本子ども健康科学会学術大会, 2022 年 11 月 27 日. 講演.
- 中山健夫. 2023. 「利益相反 (COI) マネジメント: 国内外の動向」, 第 25 回 日本医療機能評価機構 Minds 診療ガイドライン作成に関する意見交換会, 2023 年 2 月 10 日.
- 中山健夫. 2023. 「共有意思決定 - shared decision making (SDM)」, 第 13 回日本がん・生殖医療学会 学術集会, 2023 年 2 月 25 日. 教育講演.
- 中山健夫. 2023. 「ヘルスケア社会実装基盤整備事業について セッション 2 予防・健康づくり領域のヘルスケアサー

ビスの 社会実装に向けて ～アカデミア、事業者、利用者等、ステークホルダー間での共創～」, AMED 予防・健康づくり領域の社会実装に向けたシンポジウム, 2023 年 3 月 1 日. 基調講演.

- **中山健夫**. 2023. 「健康情報の読み解き方: “インフォデミック” から身を守る」, 第 19 回日本健康相談活動学会 学術集会, 2023 年 3 月 5 日. 教育講演.
- **広井良典**. 2022. 「人口減少・成熟社会のデザイン」, 日本自治総合学会研究大会 (一橋大学学術総合センター), 2022 年 5 月 19 日. 講演.
- **広井良典**. 2022. 「鎮守の森とコミュニティ再生」, 2022 年度社叢学会年次総会 (秩父神社), 2022 年 6 月 11 日. 口頭発表.
- **広井良典**. 2022. 「人口減少・成熟社会のデザイン——持続可能な医療への展望」, 第 72 回日本病院学会特別講演 (島根県民会館), 2022 年 7 月 7 日. 特別講演.
- **広井良典**. 2022. 「人口減少社会のデザイン——AI を活用した未来シミュレーションを視野に」, 第 81 回日本公衆衛生学会総会特別講演 (山梨県甲府市 YCC 県民文化ホール), 2022 年 10 月 7 日. 特別講演.
- **Shiroh Futaki**. 2022. “Attenuated Membrane-lytic Peptides for Intracellular Delivery”, *Frontiers in Peptide Science and Drug Discovery* (Singapore), 2022. 8 月 5 日. 招待講演.
- **Shiroh Futaki**. 2022. “Attenuated cationic lytic peptides for intracellular delivery”, 36th European and 12th International Peptide Symposium (Sitges, Barcelona, Spain), 2022 年 8 月 28-9 月 2 日. 招待講演.
- **二木史朗**. 2022. 「膜と相互作用する機能性ペプチド」, 第 30 回ケムステ V シンポ「世界に羽ばたく日本の化学研究」—Aldrichimica Acta コラボレーション (オンライン), 2022 年 9 月 27 日. 招待講演.
- **二木史朗**. 2022. 「抗体・機能性タンパク質の細胞内送達に向けて」, 第 72 回日本薬学会関西支部大会 (枚方). 2022 年 10 月 8 日. 招待講演.
- **Shiroh Futaki**. 2022. “Peptides that affect membrane structure and permeability”. 第 59 回ペプチド討論会 (仙台), 2022 年 10 月 26-28 日 (講演日 10 月 28 日). 受賞講演.
- **二木史朗**. 2022. 「ペプチドと膜の動的相互作用」, 膜シンポジウム 2022 (神戸), 2022 年 11 月 9-10 日 (講演日 11 月 10 日). 招待講演.
- **Shiroh Futaki**. 2023. Attenuated Cationic Lytic Peptides for Intracellular Delivery, 9th Indian Peptide Symposium (BITS Pilani, Goa Campus, India), 2023 年 2 月 23-24 日 (講演日 2 月 24 日). 招待講演.
- **宮野公樹**. 2022. 「学際研究」認識調査の検証と総合知についての考察 2.」, 研究・イノベーション学会第 37 回年次学術大会, 2022 年 10 月 29 日. 口頭発表.
- **祐野恵**. 2022. 「地方議会議員による政策形成」, 日本公共政策学会関西支部第 73 回例会 (オンライン), 2022 年 12 月. 口頭発表.

## 社会活動 (講演会・展示会などアウトリーチ活動等)

- **川上浩司**, 中嶋雅之. 2022. 講演「医療リアルワールドデータを用いた臨床疫学研究の現状」, 日本ヘルニア学会学術集会講演 (横浜). 2022 年 6 月 4 日.
- **川上浩司**. 2022. 講演「大規模診療情報・健診情報データベースの構築における、個人情報保護やセキュリティ管理の運用事例」, シンポジウム「デジタル技術活用による法医学実務・研究の活性化」 第 106 次日本法医学会学術全国集会 (名古屋), 2022 年 6 月 10 日.
- **川上浩司**. 2022. 講演「リアルワールドデータの将来に向けた課題と利活用」, 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団レギュラトリーサイエンス エキスパート研修会第 23 講 (オンライン). 2022 年 7 月 13 日.

- **川上浩司**. 2022. 講演「全国自治体由来の学校健診情報データベース構築の歴史と最新状況」, シンポジウム「学校検診のデータベース化でなにができるか」 日本小児循環器学会不整脈研究会 (札幌), 2022年7月21日.
- **川上浩司**. 2022. 講演「医療現場のデータを活用した医学研究の展望」, 第44回茨城医学会総会 (水戸), 2022年10月16日.
- **川上浩司**. 2022. 講演「医療や健康のデータベースの構築と解析の最前線」, 京都大学経営管理大学院 情報学ビジネス実践講座 (京都), 2022年10月21日.
- **川上浩司**. 2022. 講演「未来の医療に貢献する医学研究は、医療現場における電子カルテ情報から発信される」, 日本医師事務作業補助者協会第11回全国学術集会 (金沢), 2022年11月20日.
- **川上浩司**. 2022. 招待講演「医療現場や地域の健康データを活用した医学研究の展望」, 日本地域医療学会第1回学術集会 招待講演 (東京), 2022年12月3日.
- **川上浩司**. 2022. 招待講演「医療現場や地域由来の医療データを活用した医学研究の展開」, 筑波大学附属病院 (つくば), 2022年12月13日.
- **川上浩司**. 2023. 招待講義「医療データや地域の健康データを活用した医学研究の展望」, 学生団体 GEIL (東京), 2023年2月10日.
- **川上浩司**. 2023. 招待講演「学校健診情報の活用基盤の構築と医学研究」, 川崎市医師会学校医部会研修会 (川崎), 2023年2月10日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演「花祭り～日本仏教から学ぶ死生観」, 大阪本願寺, 2022年4月8日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演「医療者になるコツ」, 『未来の医師への贈りもの』第58回 (YouTube), <https://www.youtube.com/channel/UCw0GEk0HKNPEqdIBIEghwwQ/videos>, 2022年4月9日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演 “Recent Research in Aging and Dying,” Kansai Fulbright Alumni Association, (京都国際会館), 2022年10月16日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演 “Reasons for Japan’s Success (?) with Covid-19,” 西ミシガン大学訪問団 (京都大学本部), 2022年10月21日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演 “Japanese Buddhist Humanism and Nature,” 国立台湾大学環境問題講演 (オンライン), 2022年12月16日.
- **カール・ベッカー**. 2022. 招待講演「医療倫理・宗教哲学者の視点から」, みんなで考える新しい医療—医療を軸に新たなコミュニティへ (神戸アイセンター ビジョンパーク), 2022年12月18日.
- **Ito, Junichi**. 2022. 講演 “Emerging Asian economy and global trends of agricultural policy”. (浙江大学), 2022年8月29日.
- **Ito, Junichi**. 2022. 講演 “Japanese PES for the conservation of common property resources and agricultural environment”. (浙江大学), 2022年8月29日.
- **岩下直行**. 2022. 講演「持続可能な社会をつくるためのデジタル改革」, 京都大学公共政策大学院・JIAM 連携セミナー (京都), 2022年9月22日.
- **中山健夫**. 2022. 講演「患者さんと医療者が協力して病気に向き合うために:シェアード・ディシジョンメイキング <SDM>の意味」, 関節リウマチ市民公開講座 (宮崎). 2022年7月2日.
- **中山健夫**. 2023. 講演「特定健診・特定保健指導:第4期に向けた見直しの現状と方向性」, 栃木県保険者協議会. 2023年3月17日.
- **広井良典**. 2022. 基調講演「成熟社会の都市・地域デザイナー—AIシミュレーションから鎮守の森へ」, SCI-Japan・京都大学経営管理大学院共催カンファレンス「デジタル田園都市国家構想におけるスマートシティ実装に向けたマネジメ

ントとガバナンスの課題と解決の方向性」基調講演（京都大学 100 周年記念ホール），2022 年 10 月 2 日。

- 広井良典. 2022. 基調講演「人口減少・成熟社会のデザイン」，武蔵野美術大学・日本総合研究所共同シンポジウム「自律協生社会のデザイン」（武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス），2022 年 11 月 1 日。
- 宮野公樹. 2022. 登壇「ライフシフト時代のリカレント教育」，vKirirom Japan 株式会社 キリロムグローバルフォーラム 2022 パネルディスカッション，2022 年 4 月 30 日。
- 宮野公樹. 2022. パネルディスカッション「文化と問い」，Facebook ライブ，2022 年 5 月 16 日。
- 宮野公樹. 2022. 講演「異分野融合の意味と意義」，国立研究開発法人日本原子力研究開発機構，2022 年 5 月 17 日。
- 宮野公樹. 2022. 発表「データ駆動型学際イノベーションのための学際ループリック」，ジャパン・オープンサイエンス・サミット 2022，2022 年 6 月 10 日。
- 宮野公樹. 2022. 出演「学び直しブーム…でも「学ぶ」って何？」，ABEMA TV，2022 年 6 月 15 日。
- 宮野公樹. 2022. 招待講演「「学」術系「イン」タープレナーと繋がろう。アカデミアと産業界がつくる「実現すべき未来」のために」，SUNDRED x JST アカデミアの越境を応援するコミュニティ『学イン』キックオフイベント，2022 年 6 月 27 日。
- 宮野公樹. 2022. アドバイザー兼女性研究者座談会司会，日経 STEAM のシンポジウム（日経新聞社），2022 年 7 月 28 日。
- 宮野公樹. 2022. 基調講演「専門領域を超える問いの立て方を考える」，東京外国語大学学際研究共創センター『越境する知の共創』シリーズ第一回，2022 年 9 月 28 日。
- 宮野公樹. 2022. 講演「学ぶを学ぶー大学で学ぶ意味ー」，inochi WAKAZO Project inochi Gakusei Innovators' Program 教育プログラム#8，2022 年 10 月 2 日。
- 宮野公樹. 2022. 企画出展「お台場 100 人論文」，JST サイエンスアゴラ，2022 年 11 月 5 日。
- 宮野公樹. 2022. 基調講演「領域横断研究のフロンティア」，立命館大学大学院 先端総合学術研究科 パートナーシップ委員会企画講演会，2022 年 11 月 17 日。
- 宮野公樹. 2022. 招待講演「専門とは何か。総合知や学際問い直しから見据える学問論」，東北大学金属材料研究所 第 143 回金研講演会，2022 年 11 月 28 日。
- 宮野公樹. 2022. 招待講演，政策研究大学院大学 令和 4 年度第 1 回 科学技術政策プラットフォーム検討会，2022 年 12 月 21 日。
- 宮野公樹. 2023. 講義「学ぶを学ぶ」，東京理科大学 オープンカレッジ 社会人向け講座，2023 年 1 月 12 日。
- 宮野公樹. 2023. 登壇，TD 研究の成果可視化の試行・検討ワークショップ，JST-RISTEX，2023 年 2 月 7 日。
- 宮野公樹. 2023. 講演・対談「シゴトとマナビ 明日の私の歩き方ー正解がない時代だからこそ面白いー」，大学コンソーシアム京都，2023 年 2 月 23 日。
- 宮野公樹. 2023. 基調講演「問いの立て方-高校生に求めたい“研究”とは-」，全国高等学校データサイエンス教員研修会（兵庫県立姫路西高等学校），2023 年 2 月 24 日。
- 宮野公樹. 2023. 主催・座長「研究“逆”発表大会-3 つの企画と 30 の対話-」，2022 年度一般社団法人 STEAM Association 活動報告会，2023 年 3 月 4 日。
- 宮野公樹. 2023. 登壇，TD 研究可視化ワークショップ，JST-RISTEX，2023 年 3 月 6 日。
- 宮野公樹. 2023. 講演・対談「社会をデザインするための問いとは」，産総研デザインスクール，2023 年 3 月 8 日。
- 宮野公樹. 2023. 基調講演「学ぶを学ぶ、問いを問う」，海上保安大学校，2023 年 3 月 10 日。

- 宮野公樹. 2023. 基調講演「研究者がクラウドファンディングをすること」, Academist, 2023年3月16日.
- 宮野公樹. 2023. 特別基調講演「異分野融合のダイナミクス」, 第29回大学教育研究フォーラム, 2023年3月16日.
- 宮野公樹. 2023. 司会&モデレーター, AIユニット&理研 AIP 主催国際ワークショップ「AI-ELSI の挑戦—人機協働の可能性」, 人工知能ユニット, 2023年3月17日.
- 祐野恵. 2022. ポスター報告「健康データと自治体の政策づくり」, 京都大学アカデミックデイ 2022 研究者と立ち話 (京都), 2022年6月.



## 公共圏における科学技術 活動報告 2022

---

2023年8月31日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)  
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

TEL 06-6850-6111(大阪大学代表)

URL <http://stips.jp/>

E-mail [stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp](mailto:stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp)